續風雲と人物

雜吹虎鈴著

始

特207
659

帝國圖書館藏

續風雲と人物

鹿野雄著

昭和大禮紀念
帝國圖書館藏

目次

横井小楠

亭々たる喬木（三）　小楠の四變化（六）　小楠の學は氣宇濶大（九）　嚴格家で談論家（一二）　七大時務策（一五）　「國策四條」と國是十二條（一八）　小楠の酒の呑みつぷり（二二）　越前藩の賓師（二五）　小楠の楠公評（二九）　王者の師たる風格（三二）

僧月照

西の海・東の空（三九）　赤心の清僧（四一）　西郷と月照（四四）　一諸千金の西郷（四七）　近衞忠熙公と月照（五〇）　竹田街道の危難（五三）　瀬戸内海を西へ（五六）　筑紫路の秋（五九）　薩摩も佐幕派の天下（六二）　曇なき心の月（六六）

勝海舟

勝は絶代の智者（七二）　西郷と大久保と勝（七六）　勝の小楠南洲評（七八）　勝の三傑評

(八一) 勝、西郷最初の見參(八四) 江戸百萬の生死(八八) 江戸開城は歴史の花(九一)
英雄と英雄との對談(九四) 申譯に腹を切るつもり(九七) 五尺に足らぬ子爵(一〇〇)

德川慶喜

十五代將軍(一〇七) 惡い廻り合はせ(一〇九) 七郎麿さま(一一三) お世繼ぎ問題と大奥(一一五)
ねぢ上の酒呑み(一一八) 因循姑息の効用(一二一) 大政返上の一幕(一二六) 苦るしい立場(一三〇)
烈公の庭訓(一三五) 月に昔の影(一三九)

西郷南洲

俺らが國さで西郷ドン(一四七) 維新三傑の筆頭(一五〇) 手柄顔をしない(一五四) 西郷さん
の禪味(一五八) 心の底は一パイの涙(一六四) 不平をいはぬ(一六九) 東湖先生と初對面(一七二)
橋本景岳へお詫び(一七四) 月明の薩摩潟(一七八) 絶海の孤島で積んだ修養(一八二) 相手の
心になつて(一八五) 懷劍は切れますか(一八八) 皆んな打死して下され(一九三) 江戸城明渡
し(一九八) 城山の秋(二〇〇)

坂本龍馬

汗血千里の駒(二〇七) 鼻垂らしの龍馬(二一一) 築地の桃井塾(二一五) 日本第一の勝先生
(二一八) 海援隊(二二一) 寺田屋のおりう(二二四) 二ッ目釘の半玉子(二二七) 薩長連合と坂本
(二三〇) 三傑の中で大あぐら(二二三) 刀を拔く暇がない(二三六)

横井小楠

一　亭々たる喬木

横井小楠といふ人は、熊本細川藩の人で、非凡の學者だつた。

學者といふと小楠翁に怒喝されるかも知れん。この人は實學黨といはれた人で、本を讀む學者ではない。腕を揮ふ學者だから、物騷千萬な學者だ。

文化六年の生れだから、明治二年に兇刃に殪れるまで、六十一年の一生で、維新時代の人物としては、先づ以つて永生きの方である。

小楠と同時代の人物では、藤田東湖、佐久間象山、橋本景岳、吉田松陰、先づこの五人は經國の才において、宇宙を空しうするの識において、古今を貫く學において、群鳥中の鶴群だ。

此の五人の中でも、景岳、松陰の二士は少しく年齢も若く、人物の斤量才分は別ぢやが、關係からいへば、師弟の關係がある。

松陰の象山における、景岳の小楠における、直接師として仰ぎ、且つ學んでゐる。

小楠といふ人はその人相骨柄から考へて見て、隨分凄まじい權幕の人だつたと見える。豫言者故郷に容れられずといふから小楠が熊本で大いに腕を揮ふことが出來なかつた理由でもあらうが、どうも此の人の眉が上り過ぎてゐるし、また頰骨が高すぎてゐる。

東湖は勿論だが象山にしても、その藩主からは隨分重く用ひられもし、愛せられもしてゐるが、小楠となると薩張りである。

時の細川ドンが横井を見る丈けの人物でなかつたのか、左右に横井を危ぶんだものが多かつたのか、いづれにしても、わざ〳〵北國の越前から、禮を厚うして迎へに來るほどの人材を、熊本人が用ひ得なかつたのは申し譯があるまい。

若し細川が小楠を大先生に押し立てゝ、因循姑息の大氣取り屋の家老どもを排して、ドシ〳〵中原に押し出してをつたら、それこそ目先の變つた大仕事をしてゐたに相違ない。

何しろ世の中の先覺者なぞといはれる連中が、開港の鎖國のといつてゐる時代に、既に共和政治論をやるくらゐの先生だから、維新當時に熊本藩を掌中に握り込んでゐたら、素晴らしいことをしたに相違ない。

細川忠興侯以來、學問を奬勵した藩丈けに、いろ〳〵學者も出たり、人材も出てゐるが、どうも熊本人といふと偏執でそねみがある。どうも人に服して心から敎へを受けるといふやうな純眞サが乏しい。

横井小楠といへば、どこから見ても佐命の臣であり、經國の才だ。長州でいへば村田淸風土州でいへば吉田東洋、水戸でいへば藤田東湖といつたくらゐの地位にある人だから、この人をウンと任用すれば、維新の熊本は決して薩長に劣つてはゐないのだ。

この點からいふと維新の細川は、玉を抱いて瓦としたものだが、また一方からいふと、この小楠といふ人が、學問と才分とにおいては優れてゐても、人を服するの德望に至つては缺けてゐたことも、大いに關係があらう。

矢張り兇双に殪るゝ人だから……。

喬木は風に當り易しだ。殊更らに我を折つて、膝を屈するの必要はないが、大凡そ人の長たるものは、昔の近江聖人、中江藤樹先生のやうな溫かみがなくては駄目だ。

老松の枝を吹き折る秋風は、見てゐて痛快だが、春風春雨自然に若草の伸びるやうな優し

みがなければ人はつかぬ。

二　小楠の四變化

人間の學問なり見識なりといふものは、ノベッに進んでゐるものではない、物を知つたり覺えたりすることは少しづゝ進んでゆくにしても、識見となるとさうは行かぬものである。何かその人の身の上に變化がある。するとその變化に乘じて濶然として大悟するとか、徹底するとか。夜明けに蓮の花が音を立てゝパッと開くやうに、心の花も開くものだ。

かういふとこから考へを立てゝ見るといふと、横井小楠といふ人の一生にも、ザッと四ツの關所があるといはれてゐる。

その一ツは天保十年、先生が三十一歳の時に、初めて江戸へ出た、藩校の時習館で勉强をしてゐる時の少年平四郎も、隨分頴達の名が高かつたが、江戸から歸つて、識見が一段と進んだものだ。

「道德は經國安民の本なり」といつて、孔子の格物致知に基本を置くやうになつたのはこの

時の事である。

第二の變化といふのは、嘉永四年になつて、諸國漫遊を試みた。山陽道から畿内に入り、東海道の尾張まで行つて、あれから道を東北に進め、加賀越前に遊んで歸國したのだが、この諸國漫遊で、小楠の名は天下に布くやうになつた。

長州では村田清風、尾張では田宮如雲、京都では春日潛庵、梁川星巖、福井では吉田東篁など〻逢つてメンタルテストを試みたものだ。その外藤田東湖や、佐久間象山など〻は舊知の仲であつたから、正に小楠の知己天下に滿つといつてもよいくらゐで、又たその知己といふのが、いづれも當代第一流の人物であつた。

ところが小楠が熊本に歸つて來て草鞋の紐を解いて、ヤレ〳〵と我家に歸つて天を仰いで……イヤ天井を仰いで大息したさうだ。

何といつたかといふと、

「天下人無し」

と哄嘆したさうである。

これで見ても小楠の人物がどんな人柄であるかは分からう。

第三の變化はいふまでもなく小楠が開國論を說へた時だ。小楠の開國論といふものは、松陰や象山なんぞの開國論とは又た一入趣きを異にして居つたものだ。

象山などのいふのは日本本意で、日本の爲めに開國した方がよいからといふので、あの論が出てゐるのだ。

象山が先づ彼れを知らざれば以つて彼に勝つ能はずといつてゐるのが、よくその本領を發揮してゐるが、小楠に到つては、人間共存の眞理、人道の大本といふところに著眼して開國論を說へてゐる。恐らくその思想の近代的なることは、當時先覺者多しといへども、横井の右に出づるものはあるまい。まるで世界戰爭の時にウイルソンが言つたやうなことを六十年も前にチャンと申し上げてある。

第四の變化は、時勢を見くびつたか、藩政を見くびつたか、いづれにしても彼れが沼山に閑居してしまつて、當世に意を斷つてしまつたときにある。

松平春嶽に聘せられて、福井まで出掛けて敎學に努めたが、この時には現に彼れの心に

は餘技としか思はれてゐなかつたかも知れぬ……。

三　小楠の學は氣宇濶大

小楠の學問といふものはヒドク氣宇の濶大なるものだ。東湖や象山などが、日本といふ島の中から世界を見てゐるのにくらべると、小楠はドッと沖へ乘り出して、海の上から日本を見てゐるやうなところがある。

徳川氏の政治を論じていつてゐることなんか、驚くべき卓見だ。

「徳川氏の政治だつて、一から十まで惡いことばかりはないよ。中には善いことも澤山あるが、たとい善いことをしても惡いことをしても、徳川氏が日本の國家に負ふべき罪に變りはないのだ。何となれば、徳川氏は徳川氏の爲めの政治をしてゐるので、日本の爲めの政治をやつてゐるのではないからだ。天下蒼生の生靈を安んずるといふ理想がなく、たゞ徳川氏一家のみから割り出された政治をするのだから、百弊こゝに生ずるのだ。だからペルリが日本に來て

「日本には政治といふものはない」

といつたのは、洵に無理ならぬ批評だよ。……」

といつてゐる。これは小楠が萬延元年から文久ごろにかけて書いた「富國論」といふ文章の中にあるものを抄出したのだが、立派な政治眼だ、今日からいへば何でもないことかも知らぬが、まだ德川幕府の餘威を揮つてゐる時代に、これ丈けの思想を持つてゐたのは、非凡な頭腦ではないか。

又たアメリカの事を引いて言つてゐる條下にこんなのがある。

「アメリカなんぞになると、ワシントン以來、三大國策を立てゝ國家の大方針を決めてゐる。一つは凡そ天地の間に人間を殺すことほど慘酷なことはない。況んや國家が他の國家と戰つて數千萬の人命を殺すといふことは、慘酷極まりないことだ。故に天意に則つとつて宇内から戰爭といふものを熄めやうといふことに務めてゐるのだ。

第二には智識を世界萬國に取つて、大に人智を開くといふ方針だ。

第三には大統領といふものがあつて、日本でいへば將軍に類するものだが位を讓るには、

その子には決して讓らず、必らず賢者を待つて之れに讓るのだ。一切萬事公共和平を以つて國を立て、國を治めてゐるのだ」

「ソレ日本は神國にして……」

なぞと頭から沸騰點に達してしまつてゐる議論をするのにくらべると、小楠といふ人は、冷靜な考へ方をしたもので、智識の廣いのと、頭腦の明晰なのとでは、幕末第一の政治哲學者といつてよからう。

「日本魂も結構だが、竹の先に日の丸の紙をツッ掛けたやうな愛國心は、何の役にも立たん」

と小楠がいつてゐるが、今日もこの竹の先式の小供のやうな愛國心が國の進歩を邪魔してゐる——。

小楠は、

「本當の日本魂といふものは神武天皇、日本武尊、天智天皇この三方のやうな心をいふのだ」

といつてゐるが、物凄い言葉だ。

四　嚴格家で談論家

小楠は、いはゆる「喜怒色に表はさず」式の、達磨の出來そこない見たやうな人物ではないから、大いに喜怒色に表はす方で、肚の中にあることは堂々と論ずる、相手が屁古垂れやうが、何うしようが、構はずにやつてのける。

勝海舟が一日小楠を訪問した話がある。すると小楠は例の快舌を以つて、天下國家どころか宇内萬邦に向つて盛に論鋒を向けたものだ。

談論風發といふ有樣で、二百十日の大風が吹き出したやうな氣配だつた。

勝も議論屋で、おまけに負けん氣の大將と來てゐるから、小楠の議論に一から十まで感服ばかりはして居らぬ。

折を見て一撃をくらはしてやらうと待ち構えてゐるけれども、小楠が立てつゞけに論じてゐるので、半疊さえ打ち込む隙がない。

たうとう勝が何にも言ひ出さないで引き退つてしまふに至つたものだ。

流石の勝が、横井の門を出て大息したさうだ。

「何とまア偉い先生ぢやろかい。辯舌といひ、識見といひ聞きしにまさる大丈夫だ」

と、ひどく感じてしまつた。

それから、今度は西郷隆盛といふ大石にブツツかつて見た。

此の男は小楠とはまるで反對で、莫迦にからだが大きいといふ丈けで、ノホンと座はつたまゝ何にもいはない。

尋ねて見ても碌たま返詞もしない。まるで道ばたのお地藏サマ見たやうで、莫迦だか、悧巧だか、とんと見當がつかぬ。

勝は向ふが默まつてゐるからといつて、こつちが默つてゐては何の事やら、薩張り譯がわからなくなるので、仕方がなく今度はこちらから議論をする役割になつた。

かうすると勝の獨擅場だ。小楠にも劣らぬ快辯でもつて、大いに國家の大勢を論じつけたものだ。

すると西郷は、

「ハハン……」

と返詞をするばかりで、勝はたうとう一日しやべり通しで、サテ歸つて來て考へて見ると、人物の大小といふものが、カツキリと眼の前に浮んで來たのだ。

後に勝サンが嘆息していふのには、

「話を聞くのと、聞かするのとでは、大した人間の相違ぢやよ」

西郷といふ人間は、品物が別あつらへだ。これと横井と比較する譯には行かぬが、議論家の勝海舟を前において、それに一言も吐かせず、立てつゞけに議論をやつて、議論で追ひ歸したところに、横井の面目が躍如たるものがある。

嚴格で議論家で、寸分の隙もないといふ先生だから、弟子といふものが少ない。

熊本では、先生の風を聞いて門下に集まるものもあるが、あまり北風がひどいので、皆な逃げてしまふ。小楠門下として聞えたものは長岡是容、荻昌國、下津休也、元田永孚ぐらゐのものだ。

尤も元田一人を得たといふことでも、小楠後ありといふべしだが……。

五　七大時務策

さてこの横井小楠といふ人間が、一體どんな意見を持つてゐたであらうか。こんなことを詮義し出すと、生やさしいことではお話しが出來ぬ。

ざつと手短かにして要領を得るものはといふと、小楠が多分維新後に、明治政府になつてから、參與でもしてゐたころに書いたのであらうといはれてゐる國策七條がある。

これは簡にして要を得たものでもあり、且つ小楠の時務策を一くゝりにしたやうなものだから次にかゝげて見よう。

七條

一、中興之立志今日に有り。今日立ことあたはず、立たんことを他日に求む、豈此理あらんや。

一、皇天を敬し祖先に事ふ。本に報ずるの大孝なり。

一、萬乘の尊を屈し、匹夫の卑に降す。人情を察し智識を明にす。
一、習氣を去らざれば、良心亡ぶ。虛體虛文、此心之仇敵にあらざらんや。
一、驕怠の心あれば、事業を勉むることあたはず。事業を勉めずして、何をか我靈臺を磨かんや。
一、忠言必ず逆ひ、巧言必ず順ふ。此間痛く猛省し私心を去らずんばあるべからず。
一、戰爭之慘憺、萬民之疲弊之を思ひ又思ひ、更に見聞に求むれば、自然に良心を發すべし。

といふのだ。

此の七個條の中の六ケ條までは誰れでもいつてゐることで、別に取り立てゝいふほどのこともないが、第七條に至つて、驚くべきことをいつてゐる。

どうも此人の思想は飛放れたところがある。理想主義者といつた風で『横井平四郎サンなぞ實學なさる』と唄はれた人にしてはチト考へが天上天してゐる。明治時代でいふと一寸尾崎行雄といふところである。

考へ方の根本は、唐虞三代の治、即ち聖人の代にするといふのにあるから、惡いことはないが、人間がみんな聖人ではないのだから、時には喧嘩もすれば、戰爭もする。世間のことわざにも『雨ふつて地固まる』といふこともあるくらゐだから、世の中に雨もあり、風もあり、時には嵐もあり、雪もあつて、そこで進歩するといふものだが、小楠先生となると、良心といふところに重きをおくから、あまり物事が綺麗になり過ぎる傾むきがある。

第一次歐洲大戰の時にアメリカから巴里に飛んで來た大統領ウイルソンなぞが、どうも小楠と同じやうな風がある。人類の幸福とか、世界の平和とかいふお題目が、いづれも小楠の好きさうな合言葉である。

維新の政治論などをやつてゐる中にも、委任政治論を說いてゐるなぞは驚き入つたものだ。

小楠のいふのは、萬機は一君に歸するものだけれども、一人で政治は出來ない。だから有能な士を立たしめて政治を委任せんければならぬ。委任せられたものは、一君補佐の責任を

以つて政治を代用する心掛けでなければならぬと、チャンと論じてゐる。今日の立憲制度だつて矢張りこの意味に外ならぬものだらうが。

六　「國策四條」と「國是十二條」

又た「國策四條」といふ書き抜きがある。これも誰れに向つて建白したものやら、又た何時書いたものやら、年月が不祥だ。

文意から推して、多分文久か元治ごろのものだらうといはれてゐる。その文に、

四　條

一、方今の勢、治亂に關はらず、先づ一國獨立之基本を定むべし。

一、一國の獨立は、國論を明にし、好惡を定め、人心を一致するに在り。

一、國論を明にするには、內外之別あり。

一、王室幕府を尊奉す。

（所謂尊奉は其是非を問はず尊奉するにあらず。非心必ず匡し、非政必ず正し。心力餘

さず匡收）

と認めてあるのだ。

これによると、小楠は先づ何よりも「獨立國家」といふものゝ樹立が必要であることを絶叫してゐるのだ。

そしてその國家の獨立といふことは「國論を明かにす」といつてゐるのは、國策の大方針を決せよといふのだ。

國論といふものには內外の別があるといつてゐるが、これは內政の外交といふものが國論の一大方針で、これを混同しないやうに、明瞭にしてかゝらなければ、國論は明らかなり得ないといふのだ。

第四には皇室と幕府といふものを尊奉せよといふのだが、これに加へてある但し書きといふものが、流石に純理論者の言たるに恥ない。

皇室でも幕府でも、尊重はせんければならぬが、幕府なぞは理が非でも尊奉せよといふのではない。幕府の政治にも、理ばかりはないのだから、若し非なることがあれば、進んで之

れを匡さなければならぬ、理が非でも押し通さうとすることのいゝことでないと同じやうに理が非でも服從するといふこともよくない。惡いことはどこまでも匡さんければならぬといふのだ。

序だから元治元年の正月に時の將軍家茂が二度目の上洛があつた折に、恰度在京中であつた松平春嶽に建言した「國是十二條」といふものがあるから、これを次に揭げて見よう。

國是十二條

一、不關天下之治亂、一國以獨立爲本。

自然の天理に則り、自然の人事を盡し、利害得喪、一切度外に付す、此の大條理明なれば、吉凶禍福、凡そ外事の變態人心を動すに足らず。其理に隨て順應之信義をして、天下に明かならん事を欲す。

一、尊天朝。敬幕府。

誠心奉戴。非心を正し非政を匡し、必ず皇國をして治平ならんことを欲す。

一、正風俗。

風俗の正しからざる法制禁令固より廢す可からずと雖も終に是れ末政數ふるに足らず。君臣一德、治敎明なれば風俗自然に正に歸す。所謂民免而無恥且格何等の道理ぞ。人をして感動せしむ。

一、擧賢才。退不肖。

一、開言路。通上下之情。

一、興學校。

唐虞三代の大道を明にし、推て西洋藝術の課に及ぼす、其要は人君躬行心得に發して觀感の化に本づく。

一、仁士民。

一、信賞必罰。

一、富國。

一、强兵。

一、親列藩。

凡そ彼に嫌疑あらば、分明に正言し、理あれば止む。改むれば止む。或は欺に其の道を以てすれば止む。孟子葛伯仇餉の言、其理甚だ分明なり。

一、交外國。

と認めてゐるのだ。意見の大本は王道、その策するところは天地の大道に基づいてゐる。

七　小楠の酒の呑みつぷり

小楠はひどい酒好きで名うての大酒家であつたさうだ。酒を呑むと醉ふ……これは當り前の話だが、小楠が醉ふと、

「ヤッ！」

と氣合ひを掛けるから、どうしたのかと思ふて見ると、どうだ、大刀を引き拔いて振り廻してゐるのではないか。

門人達は驚ろくまいことか、皆んな青くなつてしまつて、醉も何も何處へか飛んで行つて

「先生々々、お靜かに……」

といつて制したつて、それを耳に入れるやうな薄志弱行の先生ではない。

平生が平生だから、門人衆はビク〳〵してゐる。それに酒を飲んでゐる。更らにその上に少々酩酊とお出でになつてゐるので、その大先生に大ダンビラを振り廻はされた日には——サア事だ。

何事ぞ花見る人の長刀

どころの騒ぎぢやない。

「元來近ごろの青二才どもは氣が小さくて困る。日本なんテものは、世界の豆ツブだぞ…」

門人はお互に目をくばりながら安全地帶に身を退いて、

「はい、御尤で……」

「解つたか！」

「解りました」

「ヤッ！」

と雷光がきらめく、といふやうな譯で、かうなると門人連は青くなつてヘタばつてしまつ

たものだ。

流石は小楠だ。治にゐて亂を忘れず。醉つて心法の訓練を與へるところは考へたものだ。

小楠がある時、宮本武藏のことを批評したことがある。その言葉に、

『宮本武藏が、我が細川家に聘せられて、賓師の禮を受けて武道の師範をやつた。その時の武藏の教授の方法は、年がら年中、チャン〳〵バラ〳〵ばかりはやつてをらん。武藝といふものは修身齊家治國平天下の本意を極むるものぢやといふところから、心の訓練といふことを主としてやつたものだ。

しかし又たさういふ心法といふ方にばかり凝つてゐると、實際の場合に臨んで臨機應變の手段が出來ない、恰度禪坊主のやうなもので、坐禪をしてばかりゐて、觀法をやつてゐると、得て空埋空手に陷いつてしまふのだ。

だから武士といふものは、何時何處から切り込んで來られても、直に體を變はして、之れに應ずる實地の工夫がなくてはならない、といふので、木太刀を以つて道場で稽古をするのは一ト月に六回ときめて、その外は往來を歩いてゐるやうが、寢てゐる時であらうが、友

人同志で話をしてゐる時であらうが、いきなり、

「ヤツ！」

といつて拔き打ちに切つてかゝる。これをふせぐ、とまづかういふ練習をやつたものだ。流石は劍聖といはるゝ武藏だけのものはある……』

といつたものだ、小楠が醉つ拂つて、

「ヤツ！」

とやるのも、この呼吸かも知れない。

八　越前藩の賓師

小楠はどこから見ても王者の師といふ格だ。これを古聖に比較すると、孔子といふ型ではなく、孟子の型だ。

「我が道一以つて之れを貫ぬく、曰く仁」

「夫子の道は忠恕のみ」

といふやうな、孔子の仁或ひは德といふ大本願よりも、孟子が義を加へた、才氣の方に似てゐる。

神知靈覺湧如泉。
不用作爲付自然。
前世當世更後世。
貫通三世對星天。

などゝいふところが、才氣煥發の風丰を思はせるのだ。

小楠が熊本にゐるころ、嘉永二年のころのことだ。越前藩士の三寺三作といふ人が來て、しばらく門下に學んだことがある。

三寺が何でこんなところへ來たかといふと、藩主の松平春嶽の命令で以つて、諸方を遊歷して、賢人を求めて歩いてゐたのだ。

三寺が京都に出て、當時の大學者梁川星巖の下に行つて、

「拙者此の度の旅行は外でもござらぬ。實は藩主の命を以つて天下の師たる人物を尋ねやう

と存ずるのでござるが」

といふと、星巖が、

「それならば肥後に横井小楠といふ御仁がある。この人は當代稀に見る人傑で、學問といひ識見といひ、斯人に及ぶものは、先づ少からう」

といふ話なので、三寺がわざ〳〵熊本に來た譯だ。

小楠に師事して見ると、聞きしに勝る傑物だから、半年ばかりも敎へを受けて國に歸り、藩公に復命したものだ。

その中に小楠が上國を遊覽するといふことになつて、段々と上つて名古屋から北國路に入り、越前に入つた時に、藩學の儒員であつた吉田東篁に會つて、いよ〳〵その器略學問に服した。

この時は春嶽はまだ小楠に逢はなかつたものだから、嘉永五年になつて、家臣に命じて小楠に藩學の改正意見を問はしめたものだ。

「學校問答錄」といふ建白書は、この時に小楠が春嶽に上つたもので、これによつて學制

を改革して、盛んに人才を養成したものだ。

春嶽もかういふところから、小楠を聘しようといふ考へが出て、家臣村田氏壽といふ者に命を含めて、小楠に遣はした。

愚なる心にそゝげひらけたる
君が誠を春雨にして

といふ和歌を春嶽が贈つたのはこの時のことだ。

「忠臣は二君に仕へず」

といふ論據からして、小楠が春嶽に仕へようとするのを批難するものもあつたが、小楠はそんなことに頓着するやうな、尻の穴の小さい男ではない、日本全國どころか、世界を頭の中にまるめ込んでゐる先生だから、サツサと氣の向いた方へ出掛けて行つた。

小楠が越前にゐたのは、一二年ぐらゐに過ぎなかつたが、橋本左内だの由利公正なんどゝいふ才物がその下から出て來た。

由利公正などは、殊に小楠の經濟的方面の才能を學んだのであつた。

九　小楠の楠公評

小楠が或る時、こんなことをいつた。

「拙者を任用して、思ふまゝな仕事をさせるといふならば、先づ何だぞ。拙者はアメリカに渡つて條約をとり決め、第一戰爭なんといふツマらぬ眞似をすることをやめさせる。それからヨーロッパに乘り込んでイギリスだのドイツだの、フランスなぞを廻つて、世界中天理公道に基いて、有無相通ずるの大道をとりきめて、戰爭廢止を約束して來る」

といつたものだ。世界平和、人類平等論で、世界に乘り出さうといふ人間が、我が幕末にゐたかと思ふと、ゾッとする。

安政五年の十二月といふ寒い最中に、小楠が越前の雪の中から熊本へ歸らうとする時のことだ。

横井の從者としてついてゐたのが河瀨典次郎、竹岐律次郎の二人だ。それに越前藩士の中で、由利公正と平瀨儀作、榊原幸八の三人がお伴をした。

由利等がついて行つたのは、小楠先生のお見送りといふばかりではなく、長崎に行つて海外貿易や交通狀態をしらべるつもりだつたので、恰度小楠の歸國といふよい折が來たので、一緒にお伴をしたのだ。

由利は元來酒のみではなかつたのだが、この少年をたうとう大酒呑みにしてしまふたのは小楠で、道中、盛んに由利をつかまへて飲ましたものらしい。大阪から船を出して明石の浦に泊つた時に、由利があの有名な湊川の舊蹟を探ぐらうといふので、楠公の墓に參詣して歸つて來た。

すると小楠が、

「オイ三岡、お前は今日は楠公の墓に詣つて來たと申すが、何ぞ思ひ當ることでもあつたのか……」

と聞いた、三岡といふのは由利の幼姓で、當時は三岡八郎といつたものだ。由利公正といふのは御一新後に改めたものだ。由利といふのは、三岡の舊姓である。

由利が答へていふには、

「實に感慨無量でありましたよ」

「ハハア、サテどんな風に感慨無量だつたのぢや」

「されば、私は楠公の墓の前に立つて、一體楠公といふ人はあれほどの大忠臣であり、兵家として雄才がありながら、どうしてあんな目に逢ふやうになつたのであらうか……と實に感慨に堪へませんでした。さう思ふて來るとあの墓の前が動けなくなりまして楠公が自分の前にゐられるやうな氣がいたし、何とか相談して見たいやうに思はれて、立ち去ることが出來ませんでした」

といつたところが、小楠は、その話を聞きながら、フト心づいたやうに、

「おぬしはさう思ふたか。拙者もさういふ氣がするのだ。惜しいかな規模がチト小さかつたワイ……殘念のことだ……」

といつて、サテ聲を細め、

「これは他言してはならぬゾ……」

と戒しめたさうだ。

楠公を評して「惜しむらくは規模些か小なり」といつた、小楠の評言、わからつしやるか。

十　王者の師たる風格

元田永孚は小楠の門下中の逸才だ。逸才といふよりも出藍といつた方が、更らに適切を覺ゆる。

元田は明治大帝の師で、君德を大成し奉つた、聖人といつてもよいくらゐの人だ。岩倉友山をして「明治第一の功臣なり」と評せしめたほどの人物で、學問といひ人品といひ、德望といひ見識といひ、理想の帝王の師であつた。

この元田が初めて小楠の門に入つたのは二十の折だつたといふから、小楠が二十九で、血氣盛りの最中だ。

元田がかういふことをいつとる。

「小楠先生は時務の人にあらず帝王の師たる人だ」

それを小楠が聞いて、

「元田がいふやうにわしは執政の局に當る人間ぢやないよ」

といつたさうだ。

横井に時務の才が無かつたのではないが、それよりも「王者の師」としての風格を、多分に備へてゐた。春嶽に聘せられて、講釋をしてゐる堂々たる態度を見ると、王者の師として申し分はない。

小楠が平生自分の好きな人物を擧げるのを見ると、支那では先づ三代以後、諸葛孔明と程明道だ。

それから外國では、アメリカ建國の偉人ワシントンが大好きであつた。堯舜以後の第一人者だと褒めてゐる。

日本では平重盛、楠木正行、學問では熊澤蕃山を推したものだ。横井が「小楠」と號したのは小楠公を追慕してつけたものだ。

孔明、程明道、ワシントン、平重盛、小楠公、熊澤蕃山といふ先生方を一つ臼の中に叩き込んで、つき上げて見ると、そこに横井小楠といふ人物が、朧ろげに出て來るやうな氣が

する。

參與になつてから、小楠が起稿したものに「天言」といふ一書があるさうだ。これは未完稿のまゝとなつて、刺客の手に斃れてしまつたが、その「天言」といふ書は、その名の示すやうに、小楠が畢生の心血を濺いで君德の養成完達について稿したものだといふ。

どういふことを書いたものか、巷間に傳はらぬから知る由もないが、恐らく元田が帝王の師となつて、明治大帝に進講し奉つた大方針といふものが、必らずや、この天言の要旨では、あるまいか。

元田が小楠を評していつた言葉に、

「小楠先生の文字の俊逸なるは、その言論の爽快なるに若かず。その言論の爽快なるは又たその志操の超絶なるに若かず」

といつてゐる。流石は師弟の間だ。僅かに數言の間に小楠の面目を道破しつくしてゐる。

小楠の詩に、

披書見古人。

反思志不高。
前賢直自期。
磨礪何厭勞。
汗血驚鞭影。
奔帆截雪濤。
消除經營心。
超達即人豪。

といふ感懷の一首がある。かくいふ人豪、これ即ち小楠先生である。

僧

月

照

一　西の海、東の空

幕末勤皇僧として名ある者に二人ある。一人は成就院月照で、他の一人は周防の妙圓寺の月性である。二人とも音が同じだから、時々間違が起る。

男兒立レ志出二鄉關一。
學若不レ成死不レ歸。
埋レ骨何期墳墓地。
人間到處有二青山一。

學生が詩吟に聞きなれた『出鄉關』の詩は、月性の詩で、十五歲の時の作だ。彼は自ら清狂と號し、膽大且つ氣豪なる上に常に國防の危うきを說いたので、一世彼を呼ぶに『國防僧』を以てしたくらゐだ。

月照は洛東清水寺成就院の僧で、月性の豪快にして、鯨が遠洋で潮を吐くやうな勢ひに比し、清瘦白鶴の野に遊ぶやうな風があつた。

慷慨家で、勤皇の志に篤かつたことは申すまでもないが、平生歌道に鍛錬したので、月性が詩人であるのに對し、月照は歌人として名高かつた。

弓矢とる身にはあらねど一筋に
　立てし心の末はかはらじ

と詠じて、かつてその志のほどを示したこともある。身は錙衣桑門にあるの身でも、君國に報ずるの至誠は武士に劣らぬと申すのだ

その昔、鏡月坊が、
勅なれば身をば寄せてき物部の
　八十氏川の瀬には立たねど

といつたのと同工異曲だ。

坊さんでも、百姓でも、お醫者さんでも、乃至は巾幗の婦人でも日本人に變りは厶らぬ。イザといふ時には、悉く勤皇の誠を表はすところに日本の譽れがあると申すものだ。

弟の信海坊も、月照に劣らぬ勤皇心のあつた人で、兄の後をうけて成就院を繼ぎ、紫衣を

ゆるされた程の人だ。

盛んに攘夷の祈願をしてゐるといふことが分つて、たうとう幕吏に捕へられて獄に投ぜられた。

安政六年三月十八日に、此の人は獄中で病死した。

西の海東の空とかはれども
　こゝろはおなじ君が世の爲め

との辭世を殘して死んだが、『西の海』とは兄月照が前年の十一月十五日、薩海に入水したことをいふのであるが、東西處を異にして死するも、君國に報ずるの赤誠に至つては、毫も異なるところがないといふのだ。立派な心だ。

二　赤心の清僧

月照といへば、直ぐに西郷を思ひ、西郷といへば、直ぐに月照を思ひ出す。一代の俊傑と勤皇僧とが、月明の薩摩潟に身を投じた、あの劇的シーンが、人心に深い印象を與へたもの

だらうが、西郷と月照といふものは、まるで違つた性格の持ち主でもあり、境遇も違つて居つたものだ。

第一年も大分違つて居つた。月照は文化十年の生れだから、西郷の文政十年に比べると十四年もの年上だ。安政五年に、兩人が相抱いて投海した時には、月照が四十六で、西郷が三十二の若盛りの時のことだ。

元來、月照といふ名は、安政五年の秋に、薩摩に逃げる時に變名したもので、元は忍向と申して居つたものだ。今では月照で通つてゐるが、そのころには皆な忍向と呼んだものだ。

先達ても月照の書だといつて持つて來たものを見ると、安政五年以前のものに、月照と書いてあつたので、その僞筆たることがバレて了つたといふ話だが、元來僞筆なんかする奴は心が曲つてゐるから、どこかでバケの皮が現はれる。

月照は玉井宗江といふ人の子で、彼れが十五の歳に、成就院藏海といふ僧の下に入つて頭を圓めて、中將房忍鎧といつたものだ。

天保六年の五月の十二日に藏海和尙の後繼ぎとなつて、成就院の住職となつた。この時が

月照二十三歳の折りだつた。

それからして弘化三年の暮に、山內寶性院の住職をも兼ねることになり、嘉永二年に忍向と改めたのだ。

月照の弟といふのが、矢張り僧籍に入つて信海といつて居つた。月照は佛サマの前でお經を讀んだり、死人に引導を渡すばかりで一生を終る人ぢやないから、自身の後を弟の信海坊に讓つてしまつて、それからは諸國遊歷の客となつて、風雨にさらされたものだ。

西行は人生を果敢なんで世捨人になつたのだが、月照のは西行とは違つて、王政復古の大志願を抱いて、ひそかに國事に奔走する爲めに、諸國遍歷の旅僧となつたのだ。これが安政元年の二月のことだ。

豐後の小河一敏といふ勤皇家の書いた『明烏』といふ本に書いてあるところによると

『忍向といへる僧は、勤王の志篤く、靑蓮院宮及び近衛公の御內命を受けて、謀りける事ども多かりけるに、午年の秋、御老中間部下總守殿上洛にて、王家に心をよせたる戰士は、悉く捕へて關東に下す時、忍向も捕へらるべき勢に迫る折から……』

とあつて、青蓮院宮、近衛家に關係のあつたことを書いてゐるのだ。

月照が近衛家の知遇を得たのは、諸國遍歷に出た、その翌年の安政二年三月のことだといふ。青蓮院宮に出入するやうになつたのは、何時ごろよりのことだか詳しくは存ぜないが近衛家に出入するやうになつたのと、あまり大した相違もないころからのことだらう。

高臺寺春光院に居つたり、長樂寺云云院に住んだり、歌の中山清閑寺に寓したり、東福寺靈雲院に宿つたり、水の流れの行くにまかせて行き、止まるにまかせて止まり、その間に赤き心を紅葉の色に照りはえて居つたものだ。

三　西郷と月照

月照と南洲とが相抱いて薩海に投じたといふ事件は、人の心をひどく刺戟するものと見える。

もう五六年にもなるが、ある役人が來て、わしにこんなことを聞いたことがある。

『どうも私にわからんのは西郷の心事です。あれほどの重大な責任を負ふてゐる人間、維新

の立役者である人間である西郷が、どうして月照なんぞと死んだのでせうか。どうも私に分りません』

といふ。それは西郷があまり輕卒ぢやないかといふ口吻であつた。

その時、成る程利害得失ばかり見てゐる現代人には、こんな風に考へられるものかと、碌に返事もしなかつた。

ところがこの一兩年は、大へんな西郷ばやりの時代となつて來た、映畫にもなれば芝居でもやる。お祭りまでされるといふ繁昌だが、そこでまた西郷月照投海の疑問が出て來たやうだ。

鹿兒島のサル智識ある人からこんなことをいふて來つた。

『自分は多年西郷と月照とが一緒に死ぬなんて事が、どうも腑に落ち兼ねて居つた。ところで此のごろ古老の話に、あれは西郷が月照をだまして一度海に投じ、海中で月照を絞め殺したものだ。だから月照は死んで西郷は生き返つたのだと聞いて初めて多年の疑問が解けました』

これは西郷をあまり大人物に考へすぎた結果、月照を小さく見て、百萬ポンドの金塊と穴アキ五錢白銅とを一緒にしては大損だといふやうな、人間の目方をカン〳〵で秤るやうな見方をしたものだ。

あまり莫迦氣た話と思つて居ると、又もかういふ話をするものが出て來た。

『西郷が月照を海の底で絞め殺したといふのはどうも本當らしい。その事は荒尾精がいつて居つた』

荒尾の直話として傳へて來たものだ。荒尾は西郷について居つた人間であるから、この人の直話だとすると、サウ無下には捨てられぬが、話はまるで理に落ちない。

さてかういふ話といふものは西郷サンを偉い人物に見て、月照なんぞと一緒に死なす事には惜しいといふやうな感情、或ひは勘定から出て來るのだがこれは飛んでもない間違ひだ。

西郷が若し月照ををびき出して、水の底で暗打ちをくらわしたものだとすると、この事一つで西郷の一生は臺なしに叩きこわされてしまふ。

第一嘘をいふ人間に大人物は一人もない。一時は偉く思はるかも知れないが、時がたつと

そんな奴は直ぐに化の皮が現はれるものだ。

西郷の一生が今日まで人の崇敬の標的となつてゐる譯は、アノ天のやうな心と、僞りのない眞實があつたからだ。それをとつてしまへば、西郷は三文の價値もない。

一たい月照と西郷とが、どうして九州の果てまで落ちて來たのか、西郷と月照との交りはどんなであつたか、その邊から少し糸口をほぐして來なければ、薩海投水の眞相はわからない。彼等は決して借金につまつて死んだのでもなければ、失職者となつて食へなくなつたのでもない……。

四　一諾千金の西郷

抑々西郷と月照とが知り合ひになつたのは、一たい何時ごろのことであつたか。今ま一寸思ひ合はせぬが、兎に角西郷が島津齊彬の先き走りで働らいてゐる時に、月照は近衛公の代理で王權の恢復につくして居つたこの時分から交游が始まつたものであらう。

だからさして古いことではない。もとより安政二三年以後のことだらう。月照が西郷と入

海したのが安政五年の冬だから、兩人が交つたとしても兩三年のことに違ひない。

尤も十年つき合つても腹の合はない友達もあるし、一目見た丈けで百年の知己となるものもあるから、交際の長し短かしで友達仲のよしあしを判ずるわけには參らぬ、西郷・月照なんといふ人達の交際になると、私事ではない、全く國家の爲めでの交りだから、一層その間柄は清らかなものだ。

ところで井伊大老のクーデターといふものがやつて來た。これがいはゆる安政戊午の大獄となるので、まるで二百十日の暴風が吹きまくつたかのやうな騒ぎで、勤皇家なんていふ手合ひは片つ端からフン縛つてしまへといふ意氣込みだから、日本全國、之れが爲めに慄え上つたものだ。

勤皇家どころか、井伊は、その腹臣として京都に派して居つた長野主膳なんかと共謀して主上遷幸までをも企だてたと評判されたくらゐだつた。

西郷も勿論江戸に居られなくなつて京都邊へブラついてゐたが月照は一層幕府が眼をつけて居つた。

日ごろお目をかけられてゐる青蓮院宮へかくれてゐたら、こゝまでは手が屆くまいと思つたところが、どうして〳〵、遠慮會釋もなく、幕府の役人どもの魔手が、宮樣の邸内までも及ぶといふ有樣だつた。

近衛公の老女むら岡なんぞはヒドく月照の身の上を案じて、いろ〳〵に世話もして見たが段々と危險が迫まつて來るばかりだ。

そのころ薩摩の山伏で、日高存龍院といふのが入京して來たのだが、日ごろ近衛家に出入のものだから、久々で近衛公の御機嫌を伺ふと、公はこれはよい折だと、月照の身の上を存龍院に相談したものだ。

兎に角、若し月照が薩摩へ下るやうなことがあれば、その時はお前からも、何とか薩摩の政府へ取りなして、よろしくかくまつて貰ひ度いと頼み込んだものだ。

存龍院は公のお頼みもあるので、その後間もなく薩摩へ歸つて、事の次第を政府へ申し込んだといふが、この山伏があまり爲にならかつたとも申してゐる。

そんな都合だから、近衛公も、月照を京都に置くことは。いよ〳〵危險になつたので、そ

こで西郷を召して、
『月照を賴む』
と、くれ〴〵も御相談があつたものだ。
その時に西郷が、
『ようがす、承知いたしました』
と返詞をして、さて月照を伴ふて西下する身となつた。
この『ようがす』の一言に西郷の命がかゝつてゐるのだ。

五　近衛忠熙公と月照

かようにまで幕府の追及が嚴しくなつて來ては、とても遁れつコはない。どうせ捕へらるゝものなら、こちらから男らしく名乘つて出て、有りつたけのことをいつて見よう。
とかう月照は最初に考へたものだ。
自分の身を隱す爲めに、いろ〳〵人さまに御迷惑をかけるのを、心から相濟まんと考へた

ものだらう。
で或る時月照が近衛公に出てしみ〴〵とした句調で語り出した。
『考へて見ますれば、つまらぬ私に、いろ〳〵と御厄介をかけました。いつかは御恩を報ずる時もと、思はぬ日とてはありませんでしたが、さても世の中ほど淺ましいものはありませんでした』
月照はいつになく、しめり込んでゐる。
『君の爲め、國の爲めにと嘆けばこそ、かくは法衣を雨に濡らし、風にさらして、正義を天下に伸べんとするのでありましたが、却つて幕府に諱れられ、おのが影さへ、落すに地なき今日となり果てゝは私の命もやがて終りに近づいたと存じます。私は固より名もない貧僧でござりまするから、何日何時、草葉の露と消え果てゝも、少しも惜しい命とは存じませぬ。志だに千古に耻ぢないものがござれば、必らずや群雄後に興り、王政の世にかへる時もござらう。私はこゝで潔よく縛に就き、幕吏と法廷に相見えて、赤心のほどを披瀝いたし、その上で心殘りなく死に就きたいものでござる……』

月照も、かう考へるまでには、よく〳〵思ひこらしたものに相違あるまい。

四什を聞いて近衛公は、

『まだ〳〵左程迫まつたものでもあるまい。死は易く生は難しだ。先づ隱れる丈けは隱れ、逃れる丈けは逃れて見て、さてその上の覺悟だ』

且つは慰め、且つは元氣をつけて、月照をば一先づ奈良へ落ちのばせることになつた。

こゝで南洲が近衛公から月照を引き受けて來たのだが、人間のあさましさだ。これが生別にして兼ねて死別となるとは近衛公も月照も、夢にも思つてゐなかつたことだらう。

況んや西郷が、預り物の月照と、薩摩の海で心中しようなどとは、かけても思ひ及ばなかつたに相違ない。

だから人間といふものほど分らぬものはない。

いくら修業をして、名僧智識となつて、世の中を大悟したからといつて、結局それは世の中といふものを悟つた丈けのことで、明日のことさへ、解からう筈はない。

相約投レ淵無ニ後先一。

豈圖波上再生緣。

で、世の中の事といふものは何一つ豈に圖らんやでないものはない。

借金に困まつて夜道を歩いて居つたら、ガマロを拾つた。開いて見たら金百萬圓あつた。

こんな豈に圖らんやは結構だが大凡そ豈に圖らんやは始末のわるい方にくつゝいて來るやうだ。アネ圖らんや妹然らんや。アニ圖らんや弟然らんや。何の事だか解らぬのが人生だ。

六　竹田街道の危難

扨て。月照をお預り申した西郷は頃しも安政六年、秋は九月の九日、重陽節句の夜も深々と更け渡つたころだ。先づは御幸町三條上ル竹原好兵衛といふ仁の宿屋に泊まつた。

十日は朝のしら〴〵と明けそむるころ、一行は南都へとさして向つた。月照坊は轎の中にあつて人目を忍び、表て向きは薩摩のサル貴僧が京に上つての歸り途といふ觸れ出しだ。

西郷ドンは直ぐに轎の傍について、例の巨大なる體軀をドシリ〳〵と運んで行く。轎より先きに立つて、やゝ數十歩も離れて歩くのが有村俊齋、轎のうしろから、心配さうな

顔をして、ヨチ〳〵ついて行くのが、月照の僕重助である。
箱根の山から三島に下る雲助ならば、それこそ大虚空を飛んで、ハツといふ間に一萬五千里ぐらゐは往復するかも知れぬが、京都の轎屋とくると、土地柄頗ぶる悠長なものだ。
格堂の句ではないが、
蛇穴を出でゝ遲々たる行衛かな。
で、一行は氣が氣でないが、あまり急がして氣取られゝば、それこそ大變だ。
心は矢竹にはやつても、顔には出さぬ。まだ星の見える空の下だから、人通りはないが、時に幕府の役人らしいのが、一人二人、行き過ぎながら、怪しげに見かへる。その度ごとに流石の西郷もヒヤリとしたものだ。
道を竹田街道にとつて、さる茶屋の邊まで來ると、何だかガヤ〳〵と人聲がする。よくよく注意して見ると、幕府の捕吏らしいのが、二三十人も集まつてゐる樣子だ。
さア、こゝへ來掛つて西郷も有村も、お互に顔見合はして困りはてた。
勿論權道はない。一本街道だから、この前を通らない譯に行かない。通れば何とか訊問さ

れるに違ひない。
『サテ困つた』
と思つてゐる間に轎屋は何にも知らないから、サツサと道をいそぐ。
茶店の前まで來たと思ふ時に西郷は何と思つたか、月照の乘つてゐる轎を、その人混みの中に、ドスンと下ろさしたものだ。
眼の玉を眞ン圓くして驚ろいてゐる俊齋をかへり見ながら、
『おハン、何チウこつちや、時刻をとり違へたと見えてえらい早出でごわしたのウ……』
といひながら、天地も崩るゝ大笑ひ、
『ウハハ、、、、、』
とやつたので、有村もやつと元氣が出た。
『さようでごわしたかのウ、先きは永いこつちや。先づゆる〳〵と參らう』
その話しつブリが、眞に何氣ない有樣であるから、これには幕府の役人どもも、すつかりしてやられたものと見える。

誰れ一人一行を見とがめるものもない。茶店の婆サンがくんで出す番茶なんどをすゝり、平然たるものだ。

それから婆サンが轎の中へもお茶をと思つて、

『お茶召しませ』

と出した時、簾の中から雪のやうな白い手が出た時には、流石の西郷もヒヤリ……としたさうである。

七　瀬戸内海を西へ

京都で危ないものが、奈良で安全であるわけがない。

『奈良まで行つたら何とかなるであらう……』

と思つて來たものゝ、京都と奈良では眼と鼻の間だ。

伏見の船宿まで來ると、西郷は一まづ京都にかへり月照は俊齋に伴はれて大阪に下つた。

當時吉井友實が大阪に居つたので、俊齋は早速之れに談判した。

『實は西郷と月照を預づて來たのだが、どうも此の邊にウロついてゐるのは劍呑だ。西郷ドンと相談して、薩摩まで落さうといふことになつたのだが、西郷が京都から來るまで、何處ぞ、よい隱れ場はござるまいかのウ……』

有村の相談を受けて、吉井が世話をして呉れたのが、幸助といふ、薩藩の上仲仕をしてゐた者の家だ。

こゝで有村も一度京都へ取つて返へし、所用を果さうといふので、月照を大阪において立ち返へることになつた。月照は、奈良までだといふので、ツイ着のみ着のまゝで、フラリと出て來たのだが、途中から樣子が變つて、いよ〳〵九州の果て、薩摩の國まで落ちて行くといふのでは、これは容易ではない。第一着代への一枚ぐらゐは用意しておかんければ相成らぬ。

有村が京都にかへるといふのに托して、月照は、成就院坊宮近藤正愼といふ人に手紙を寄せて、いろ〳〵と手まわりの品を取りよせた。

さて西郷、有村は京都に歸つて來たものゝ、幕府の探索がえらい嚴しい、自分の影法師に

さへ氣を置かねばならなくなつたので『これではいかぬ』といふので、西郷、有村、北條の三人が打ちつれて大阪へ下つて來たものだ。

そこでいよ〳〵月照をつれて鹿兒島へ逃げようといふので、九月二十四日、その日の早朝に小舟をやとうて土佐堀からこぎ出した。

その時の船の準備などは、一切吉井がしてくれたものであつたが、船が出ようとすると、捕卒らしいのが、怪しげな眼つきで、覗つてゐたのである。

實に危機一髪といふところで舟は出てしまつたが、吉井は氣が氣でないので、天保山沖まで士堤つゞきに歩いて、影ながら舟の安全を見送つたものだ。

舟の中では、月照は毎朝々々東天に向ひ、皇宮に兩手を合はして拜してゐたといふが、大阪を出る時の月照の歌に、

難波江や芦のさわりは繁くとも
なほ世の爲めに身をつくしてん

自分の身の境遇の如何にかゝわらず、勤皇の赤誠は、どこまでも月照の心にあつた。

東風を滿帆に孕んで、瀨戸内海を西に奔る舟足の早きを見ては、

追風の矢を射るごとく往く舟の
はやくもことを果してしかな

とも詠じてゐる。

いかばかりうきめ見るとも行末に
こゝろつくしの甲斐もあらなん

といつてゐるが、この西行は、何の甲斐もなかつた。

八　筑紫路の秋

月照一行の船が馬關についたのが、大阪を發して丁度一週間目で、十月一日であつた。

一行は一先づ上陸して白石正一郎の家に休んだ。この白石といふ人は馬關では有名の豪家で且つ勤皇家であつたので、海峽往來の有志者は、大がい白石の厄介にならぬものはなかつた。

着いて見ると、丁度前日九月三十日に島津齊興侯が、こゝを渡つて薩摩へ行かれたといふ話だ。

西郷はその話を聽くと、直ぐその跡を追つて卽日出立してしまつた。それは京都の多忙を話す必要もあり、且つ月照保護のお賴みもしようと考へたからだらう。

月照と有村と北條とは、一先づ白石家で一泊し、明くる十月二日に戸畑港に入り、三日にいよ〳〵筑前博多に着し、北條右門の家に身を潜めた。

筑前といへば、往昔太宰府のありしあとで、菅公の故事もあれば、元寇の勇ましい昔語りもある。

こゝまで來ればまづ安心と、月照は人々に案内されて白砂青松の間に歩を運んだ。

箱崎八幡宮には、畏くも『敵國降伏』の勅額が掛つて居る。

海濱を洗ふ波の音には、昔ながらの響きがあつて、今にも元兵十萬が、鬨をつくつて押しよせ來るかにも思はれるのだ。

月照の歌に

白波のよせしむかしは今もなほ
　　忘れはせじな箱崎の神

又たこういふのもある。

行末はいかにかならん不知火の
　　筑紫の海によするしら波

こんな具合ひで、月照が博多に居つたのは、十日あまりにもなつたらうか、するとその中に馬關の白石から急使が來た。

急使の傳言では、南洲、月照兩人捕縛の爲めに、幕吏が下關に來たが、何でも直ぐに博多に向ふやうな樣子だから、急いで鹿兒島へ逃げろ……といふ使ひだ。

そこで月照は又々旅裝をとゝのへ、十月十七日博多を出たものゝ誰れも鹿兒島までついて行くものがない、そこで平野次郎がこの事を聞いて、大へんに同情し、筑後川を下つて久留米に到り、柳川、小保、野間、阿久根と、泊りを重ねて鹿兒島についたのが、もはや初冬の風寒き十一月八日であつた。

年ふとも忘るべしやは不知火の
つくしにつくす人の心を

これは月照が平野に謝するの、心からなる三十一文字であつたのだ。

野間の關へ來た時には一寸風むきが怪しかつた。迂濶りするとトツつかまるところを、危ふく引きかへして、今度は船で阿久根へ廻つたのだ。

野間の關ゆるさで今宵さつま潟
しるべを波のうき枕かな

十一月といへば、もう眞白な霜だ。それをはるゞと京都から逃げて來た月照が、とぼとぼと風に吹かれて行く。實に同情に値ひする。

霜むすぶ風は糸針ならねども
身を縫ふばかり寒けかりけり

かくしてやつと九州の南端、鹿兒島へ來たものゝ、こゝが又た安全地帶ではなかつたのだ。これより先きは最早や海だ。月照の運命がこゝで窮はまつたのは致し方もない。

九　薩摩も佐幕派の天下

浦安くけふは薩摩につきにけり
こゝろつくしの人をたよりて

月照はやつとの思ひで、薩摩についたのだ。先づ日頃の知り合ひであるから、日高存龍院に投じて、そこで西郷とも面會し、身の行く末を相談したのであつた。

あまの舟人にはゆめな語りそよ
薩摩の瀬戸に我れわたり來と
都にて誰れかあはれと思ふらん
心つくしのはてにこすの身を

これほど草にも露にも心をおくやうになつた月照は哀れむべき僧であつたのだ。

西郷は俊齋と協つて、先つ島津齊興侯に請ひ、島津豐後にも說いて、何とか彼れの安全を保し與へたいと奔走したが、當時の薩摩藩が、佐幕黨の天下となつてゐた時だから、西郷の

要求は一つも容れられなかつたのだ。

月照の頼つてゐた存龍院といふのが、又た頼み甲斐のない男で、いつの間にやら、月照が投じたことを藩廳へ内通したものだから、藩廳では直ぐさま、月照を旅館俵屋へ幽閉したものだ。

兎も角幕府の追求が嚴しいので執政の島津豐後もどうすることも出來ない。そこで西郷を呼んで、

『御覽の通りの事狀では、月照を薩摩に置くのは、却つて危險だ。足下は一先づ彼れを日向につれ、しばらく法華ヶ嶽に潜んで居つて貰ひたい。その中には何とかならう』

との相談だ。

西郷が此の話を聞いた時に、

『これでは駄目だ』

と考へた。その譯は、藩廳で月照を助ける氣があるのならば何も日向までやる必要はない。如何に幕府の追求がきびしいといつたところで隱す氣になればいくらでも場所はある。それ

を日向に行けといふのは、自分の藩で月照を捕へさせたのでは面目がないから、他國で、幕府の役人に引渡さうといふ肚にちがひない。

自分が月照をつれて日向に行くのは、彼れをあざむいて幕吏に引き渡すやうなものだ。西郷如何に窮するといへども、男を賣るやうな事は出來ない。

かう西郷が思つたから、立派に決心をつけ、旅裝束をした西郷が十一月十五日の夜深く、月照を俵屋に訪づれた。

どうも西郷のそぶりがおかしい。坐つたまゝ一言もいはずに默つて眼ばかりパチクリさしてゐる。

月照は早くもそれを覺つたと見えて、

『平野サン、洵に失禮だがお茶を進じて下さらんか』

平野が承知して坐を立つて、歸つて來た時には、兩人は既に默しておつた。

西郷はこれから日向へゆくといふこと丈けを月照に話したものと見える。投海の心事までは話さなかつた證左には、

舟人のこゝろつくしに波風の
　危うき中を漕ぎて出でにき

とある歌でもわかる。

一切は舟の上でのことだ。

十　曇なき心の月

その晩、一緒に舟に乗つたのは、都合六人であつた。

西郷隆盛
僧　月照
平野國臣
僕　重助
藩吏阪口
同　高師、

藩吏が同船してゐる上は、迂濶なことは話せない。眉秀で眼爛々たる平野が、

『幕府當今の措置、甚だ……』

と慷慨談に移らうとするのを

『今夜は何でごわすのウ……さやう氣のつまるやうな話は止めて、浮世ばなしでもしようではごわせんか』

と西郷が、いつにない酒肴の用意をして、一同をもてなした。

その中に月照は座を立つて船の上にのぼり、月かげに矢立をとつて、懐紙に歌を認めて立ちかへつて西郷に示した。それは先の『舟人の……』歌だ。今一首の歌は、

答ふべき限りはしらで不知火の
　つくしにつくす人のこゝろに

といふのであつた。それを見た西郷は、

『いかにも』

と打うなづくのみだ。

やがて西郷と月照とは、袂をつらねて舷上に立つた。皓々たる十五夜の明月は、冲天に冴え返つてゐる。

西郷はおぼろにかすむ海岸の風景を指呼しつゝ、磯路の長汀曲浦、心岳寺の山門なぞ、島津氏武門のほまれ、齊彬公ありし日の思ひ出なぞを語り出した。

西郷はたしかに舟に乘る時、日向に赴くと決した時に、早くも死を決してゐたであらうと思はれるが、それと月照に打明ける機會がなかつたのであらう。

そこで西郷は、月照とたつた二人になつて、船の上で語る機會を得た時、初めて祕中の心を月照に物語つたものと見える。

聞いて見れば月照とても、同じ思ひに違ひはない。身は桑門に入るといへども、心は夙に大君に捧げてゐる。二人は相抱いて黑潮のうづの中に投じた。

後に西郷の懷ろの中から出た月照の懷紙には、

曇りなき心の月も薩摩潟
沖のなみ間にやがて入りゐる

と認めてあり、又た他の一首には

大君の爲には何か惜からん
薩摩の瀨戸に身は沈むとも

とあつた。この二首は、共に決死の辭世の歌だが、先の歌には『危うき中をこぎて出にき』とあつて、死ぬる心は少しも出てゐない。出てゐないばかりか、多少の希望さへかゝつてゐる。

ザブンといふ水音に驚ろいて、先づ平野が舟の上に出て見ると最早兩人の影が見えない。平野は手早く脇差を拔いて帆綱を切つた。阪口は水棹を突き立てゝおいて、やがて流るゝを漕ぎもどして見ると、相抱いた兩人の身體が波上に浮き上つて來た。

大急ぎで舟の上にあげ介抱をした結果、西郷は死中活を得たが月照は遂に甦らなかつた。

西郷は半月も物が言へず、死せる人の如くであつたが初めて口が利けた時には、たゞ「月照々々……」と月照の名ばかり呼んでゐたといふ。

それから星落ち月沈んで十七年、月照の墓前に立ち、

頭ヲ回ラセバ十有餘年ノ夢。

空シク幽明ヲ隔テ、墓前ニ哭ス。

と悲しんだ西郷が、何で水の底で清僧を絞め殺すものか。

西郷と月照との因縁をたどり、西郷が近衛公に頼まれて、大丈夫一諾を與へ、之に殉じた任侠を察すれば、こんな傳説は一瞥の値ひもないが、それが疑問となるところに、世の中の移り變りといふものが見える。形ばかり見て心の尊さを知らぬ者には、いつでもこんな疑ひが起るものだ。

勝海洲

一　勝は絶代の智者

時に勢ひといふものがある。それだといつて、勢ひに乘ずるものは名を成し、勢ひに逆らふものは、自から振はないが、勢ひに乘ずると、乘ぜざるとによつて、人物の斤量には變はりはない。

禪林の句に「一人は順風に帆を張り、一人は逆流に梶を把る」といふ句があるが、幕末における勝海舟の立場を見ると、全くこの逆風に舵を把るの形がある。

「大厦の倒るゝや一木能く支へず」

とあるが、その倒れかゝつた大厦を全身の力を以つて支へたところは、何といつても勝海舟の偉さを思はねばならぬ。

「徳川を賣る者は海舟なり」

と、幕臣の中から罵しられもするが、「徳川を賣る」といふやうな不純な心で、あの江戸城開渡しといふやうな大仕事は出來ぬ。

勝さんは智謀の士であつたから、そこからいろんな噂さも出るが、策略ばかりでは人心を服することは出來ぬ。

我輩は江戸城開渡しの大舞臺に立つた海舟の姿を見て、何とはなしにホロリとさせられるのだ。

一切萬事を我が身に引き受けて、世上の毀譽褒貶を、塵ほどにも念頭にかけず、皇國の生靈を救ひ、德川家の面目をも立派に立てゝやつた心情は、立派なものである。

慶喜さんも良い家來を持つたといはなければならぬ。持つべきものは良臣だ。

淺野内匠頭が、

「五萬三千石に過ぎた家來は大石ぢや」

といつて、いつも大石々々といつて寵愛したといふが、その大石があつてこそ、初めて判官の名譽が千古に傳はるのだから……。

慶喜が勝をどれほど寵愛したかは知らぬが、寵愛しようが、しまいが勝は慶喜の良臣だ。

慶喜さんも、何ちらかといふと、頭の鋭い人間だ。勝に至つては絶代の智者だ。頭の鋭い

のと鋭いのとが一緒になつたのだから、鋭敏の鉢合はせをしたやうなところもあるが、何にせよ、一人の勝海舟があつたといふことは、德川の終りをして、少くとも脱線せしめずに濟んでゐるのである。

榎本鎌次郎なんぞも、豪傑には相違ないが、函館五稜閣に立て籠つて、善戰したところは慥かに一方の將たるに恥ぢないが、それ丈けに戰つた明治政府に對し、後には任官して大臣になつたりするのよりは、勝が美事に降參して、靜に閑雲野鶴を友として、一生を送つた高風の方が、どれ丈け人品を高くするか分らぬ。

戰爭でもさうだ。攻擊するよりは、退却する方が、どれほど六ケ敷いかわからない。攻むる方なら、どんな凡倉大將でも、さしてボロを出さぬが、退却となると、古今の名將でなければ、上手には參らぬ。

議會などでもさうだ。雄辯家などゝいつて、人氣をとつてゐるものは、大がい大臣になると一日も持ちこたへ出來ぬやうなもので、本當の勇氣は、退勢により、逆境によつて初めて現はれるものだ。

二　西郷と大久保と勝

明治四年ごろであつたか、或る日大久保が、西郷と勝との兩人を呼んで御馳走をした。

時に大久保は、杯を洗つて勝にさしながら、

「先づ一杯飲まつしやれ」

「これは〳〵」

さしつさゝれつする間に、主客共に微醉を帶びていゝ氣持になつた。さて大久保がいふには

「今日から思ふと、夢のやうな氣が致すが、お互に御一新の時には心配しましたなア。忘れもせぬ戊辰の二月ぢや。いよ〳〵官軍が東下しようとする時に、かういふ論が出ましたよ。それはナ勝さん、あんたが必度軍艦を率ゐて攝海に押し寄せ、灣口を封鎖して、海路の連絡を絶つぢやらうと、こういふ論ぢや。これは尤もぢやといふので、おいどんが伊知地、山田の兩人に丹波路を視察せしめて萬一の場合はこの方面から連絡をとるつもりでござつたよ。その中に大本營は駿州靜岡へ到着したといふ報道と一緒に、西郷どんから、敵兵には一人も

出逢はぬといふ知らせがあつた。そして西郷どんは、箱根の關も何でもないから、一擧して江戸に乘り込むつもりぢやといふ手紙ぢや。そこでおいどんは、これは大變ぢや、これは必度西郷が勝の計略にはまり込んでどえらい目に逢ふに違ひないと考へたのぢや。そこで急に人を出して、西郷の先き廻りをさして江戸の樣子を探ぐらせたものでごわした。この時の心配といふものは、とても鳥羽伏見の戰爭どころではなかつた。今ではそれも昔し話しでござるがのウ……」

大久保は當年を想起して、感慨無量の面持ちだ。勝は容を改めて、口を開いた。

「いや御心配のほどは、お察し申し上げる。當時の拙者には、敢て關東に割據しようといふ考へはござらぬ。又た官軍に對して武者振ひをしようといふ功名もござらぬ。固より、德川一家の社稷を存することのみに腐心した譯でもござらぬよ。幕府といつても、朝廷といつても、同じ日本人でござるからのウ。拙者當年の希望は、百萬無辜の生靈を殺さず、利害共に外國人の侵略を受けないで、天下後世の爲めに、立派な國家の基礎を立てたいといふ外はなく、公道大義のあるところに從がつて進退したまでござるよ。その時、この西郷さんがご

ざつてなア、大度量を示し情義並び至るの至誠を披瀝されたので、拙者はもう一言も出なくなつたのぢや。徳川が恭順をしてゐるのに、當時若し官軍が理不盡に江戸城を攻めたらどうぢや。百萬の生靈を苦しむるばかりぢやない。王師の名は忽ちに消滅してしまつて、無名の戰さの爲めに、江戸をあげて焦土と化し去つたでござらう。そこを察して進軍を中止されたのは、流石は西郷ドンの大卓見ぢやよ」

勝も暫らくは當年の人となつて懷舊談を試み、夜の更くるのも知らなかつたといふ。

人間の事業は智慧ばかりでは出來ぬといふことを、この一場の會話の中でも察することが出來る。すべては至誠なのである。

三　勝の小楠南洲評

嘗て海舟が、かういふ話をしたことがある。

「御一新の前に自分が西國に參つた折に、先づ熊本に行つて、横井小楠に面會したところがどうも見上げた學者で、滔々として時務經綸の策を論ぜられた。その論鋒の鋭いことは、お

話にならぬ。自分はたゞ聞き手で、何にもいふことが出來ないくらゐぢやつた」

横井平四郎といへば時務を知るの俊傑で、通り一ぺんの學者ではない。松平春嶽に聘せられて、越前藩の政治顧問になつてゐたこともあるが、隨分頭のすゝんだ學者であつた。議會で尾崎が共和演説をやつたといふので、一時國賊呼はりをされたこともあつたが、なかなか横井などは、夙の昔に共和政治論をやつてゐる。尤も權井の共和論は、王政共和論で毛唐などのひねくりだしたのとは、大分違つてゐるのだ。

そこで海舟がこの先覺的卓識家にブツつかつて、サンぐに吹きまくられたものらしい。

勝もなかゝ横井に劣らぬ議論家で、眼も光れば、頭も透つてゐる。それに口達者だからどうしてゞ、横井なんぞに負けるもんかとの肚で、ブツつかつたのだ。

それがいよゝ小楠に面すると、あの鋭利な論鋒で、息もつかせずやつたのだから、勝の頭にはひどくこたへたものと見える。

ところが今度は、西郷に逢つて見ると、まるで横井とは風が變つてゐる。

西郷はこちらから何をいつてもたゞ、

「ハァハァ……」
「左様でごわすか……」
と肯づくのみで、とんと物をいはぬ。
横井に逢つて、大いに肚をきめて來た勝が、まるで見當が違つてしまつた。
いくら議論を吹つかけても、たゞ西郷が聞いてゐるばかりだから、仕方なしに、今度は勝が議論をする役目になつてしまうた。
當時勝がどんなことをいつたか、幕末危局に對する卓見のありつたけを述べたのだらうがそれを聞いてゐる西郷が、感心したとも、せぬとも何ともいはぬ。勝はポカンとして、鳩が豆鐵砲を食つたやうな調子で歸つて來た。
後に勝さんが兩雄會見談の批評をしていふには、
「說法をするのと、させられるのとでは、大分人間の段が違ふわイ……」
といつたさうだ。
勝が度々西郷と相見るに及んで、西郷の偉器たることは、その度ごとに勝の頭にコビりつ

いていつた。
後年の江戸開城の時に、兩雄會見して肝膽相照し、百萬の生靈を安んじたことは、實に近世史中の花ともいふべきものだ、あの時、一寸高輪で逢つたくらゐで兩雄がすぐに肝膽を照したのではない。
そのずつと以前から、勝は西郷の人品に服し、西郷は勝の人爲を推稱して居つた。
西郷が官軍の參謀として、トコトンヤレナで來たといふことを聞いて、勝は江戸からそれを眺めながら、
「これは話せる人間が來るわイ」
とお待ち申し上げてゐたのだらう。

四　勝の三傑評

勝は切れ味のいゝ名劍のやうなものだ。それにくらべると西郷は、サヤばかりで中味がない。空つぽである。

中味がないのは、心がないのではない。人を殺さぬ、心がチャンと納まつてゐるのだ。

昔の話だが面白い話がある。あの無手勝流をあみ出した塚原卜傳に三人の子があつた。すると卜傳が三人の子の武藝を試めして、一番よく出來たのに、その流儀の奥傳を讓らうと思つたのだ。

そこである一日のこと、卜傳先生は奥の座敷に端然として坐し、間の唐紙の上のカモヰのところに一升桝をあげて、唐紙を開けると、それが落ちる仕掛けをした。物好きな親爺があるものだが、子供の名を呼んで、召し寄せた。

最初に來たのが三男坊、襖を開けると一物は早くも天井から落下した。ハッと思ふ間に抜く手も見せず、一刀兩斷、一升桝を眞二つにしてしまつた。頗ぶる鮮やかな手の内だつた。

次が二男坊、落ちて來る桝を一瞬の間に右の手を出して、掌の上にのせた。高が一升桝ぢや刀にかけるほどのことはないと思つたのだらう。

すると三番に呼び出されたのが長男の甚六だ、彼れは目俊くも一升桝のブラ下りを見出して先づ之れをとり下ろして、

「汝は座敷などに居る代物にあらず、臺所にまかり下りをれい……」

といつたかどうかは知らぬが、下女を呼んで持ち去らしめ、やをら襖を開いて兩手をつかへ

「御父上、何ぞ御用でござりますか」

慇懃なる挨拶ぶりを見て、卜傳先生が、この甚六こそ、我が無手勝流の奥儀を傳ふべきものぢやと見込んたといふ話。

これは作者の作話か何かであらうが、面白い話だ。

海舟の人爲りを見てゐると、そのすばしこいこと、丁度この抜き打ちに切つて捨てた三男坊に似てゐる。

西郷になつて見ると、手先の藝當ではない、心の働らきである。

勝の自筆の稿本中に、維新の三傑を評した一節がある。それを見ると、勝が西郷をどんな風に見てゐたかゞわかる。

「從古、爲邦家に大勳あるもの、令終を得しは甚だ稀也。維新の際、大事に任じ公議を決し、斷然不顧、其能に不矜、其功を不思、洪業成るに當て其瑣事は人に任じ、如忘

如不知者は、予於西郷氏視之。次之大久保氏、木戸氏あり、共に一世之雄、然りと云へども、西郷氏に比せば亦降る事數等、兩氏が爲す所、非常にして端倪すべからず。是を以て竊に忌憚せられ、其説反つて諸官と不相合、西郷氏は不然、自ら人を評して云、彼は余に勝れり、亦予の不及所也と。絶て介意之事なし。其遠識大度、豈一世にして窺ひ知るべけん哉」

海舟の三傑評、大いに見るところがあると申さねばならぬ。

「西郷を知るもの、我れ一人」

と勝はよく人に語つたさうだが、西郷の一事一情を知るのいひではない。眞に西郷の心友は我れ一人のみといふのが、勝の言裏にふくまれたる意中だらう。

五　勝、西郷最初の見參

勝と西郷とが、初めて顔合はせをしたのは、元治元年九月十一日であつたといふ。

「海舟日記」九月一日の條に、次のやうな一節がある。

「薩人大島吉之助(西郷)吉井幸助(友實)青山小三郎來訪云、征長の御議、紛々不決、關東御混雜、實に策の行はるべきなし。邦人紛擾再出せん歟。如何にして可ならんやと云。今天下危急日々相迫、一人も實意邦家に盡すものなし。上下大抵、私營小得、又嫌忌を避くる而已、如斯にて如何之瓦解せざらん哉云々」

勝の日記には、それ以上のことが認められてゐないが、當時西郷が大久保甲東に與へた書簡の中に勝との會見を報じてゐるものがあるが、それによつて見ると、西郷は長州征伐(第一回)に對して、將軍の親征を促がしてゐるやうである。

すると勝は、どこまでも幕府絶望論で、

「將軍家の親征なぞ、とうてい出來た沙汰ではござらぬ。まア聞いて御覽なされ、幕府の內情はこの通りでござる」

といつて、勝は、幕府の腐敗から紊亂から、殊に財政上の窮乏について、何の隱すところもなく、剔抉して、

「かやうな始末でござるによつて、とても將軍家の親征などは思ひもよらぬことである。よ

しんば親征になつて見たところで、決してその實はあがり申さぬ。却つて將軍の威令を墮すやうなものでござるよ」

勝は當時、不平、大不平の境地にあつたのだから、幕府に見切りをつけてゐたのだらうが

「今日のやうに奸物が局に當つてゐては駄目ぢやぐ〳〵」

と匙を投げての話しつぷりであつた。

そこは西郷だ。

「奸物がゐて困るなら、その奸物を掃除したらようごわせう」

勝はどこまでも捨て鉢である。

「奸物を掃除するのはお易い御用ぢやが、さてその奸物を掃除した後に誰れを用ゐるか、人物がないといふものは致し方もないものぢや」

と投げた匙を拾はうとしないのだ。

「幕府に人物がないと仰せらるれば致し方もごわせん。さようなれば諸藩の力で周旋する外はござるまい」

西郷は、どこまでも現實を打開しようとする。

「諸藩の周旋でござるか、これも結構でござる。しかしいくら諸藩の周旋があつても、幕府に之れを受けつけるものがなくては、折角の周旋も、何の役にも立ち申すまい」

勝は見切りをつけた幕府に、どこまでいつても手のつけやうはないとしてゐる。

その會見が兩雄相識るの、抑々の最初であつたが、西郷はこの時の勝を評して、

「勝さんにはじめて面會仕つたところが、洵に早や驚ろき入つた人物ぢや。初めの間は少々叩いて見ようぐらゐに考へてゐたが、却々どうして、叩くどころか、こちらがトント頭を下げてしまつた。どれほど智略のある人やら、見透しの出來ぬ人で、英雄肌合の人でごわした。仕事の出來る點では佐久間象山以上でごわせう。學問識見に到つては、佐久間は拔群のものでござるが、危局難局の現場に臨んでは、勝さん！と、ひどくほれ込んでしまうた」

といつてゐる。すぐに惚込むところが西郷である。人のアラを捜して塵ッ端ほどの功名を立てようとするやうな、ケチな根性は毛頭ない。

六　江戸百萬の生死

伏見鳥羽で官軍と會桑の兵とがブツつかつたときいた時に、江戸にあつて勝が天を仰いで洪嘆したさうである。

何故に慶喜を死諫し、恭順を表しなかつたか、戈を逆にして王師に抗したのは、何としても徳川十五代の大疵である。

泣いて見ても、嘆じて見ても、既に出來たことは、取り返へしがつかない。そこで、王師の東進をむかへて、途中で何とか慶喜恭順の眞意を傳へたいものだと思つた。

こゝでの苦心が、實は勝一生中の一大難關であつたのだ。江戸城談判とまで進んでしまへば、事はかへつて氣樂なのだ。

そんなことは知らぬから、世間では、高輪薩邸における、勝、西郷兩雄の會見を、古今の名劇として推稱し、當時における勝の畢生の苦心を談ずるものが多いが、實はあの時にはもう結論に近づいて居つたので、序論や中味は、チャンと出來あがつてしまつて居つたのだ。

官軍の中堅がまだ靜岡に出ない前に勝は一書を薩藩士百川某といふのに托して參謀西郷の許につかはしてゐる。

その手紙の文面に、

「無偏無黨、王道蕩々たり。官軍逼鄙府といへ共、謹で恭順の禮を守るものは、我徳川氏の士民といへ共、皇國の一民なるを以ての故なると、皇國當今の形勢、昔時に異なり、兄弟牆に鬩げども外其侮を禦ぐの時なるを知ればなり。雖然、鄙府四方八達、士民數萬來往して、不敎の民、我主の意を解せず、或は此の大變に乘じて不羈を計るの徒、鎭撫盡力、餘力を遺さずといへ共、明日の變、誠に計難、殊に小臣鎭撫方、殆ど盡き、手を下すの道なく、空しく飛丸の下に憤死を決するのみ。雖然、後宮の尊位(和宮を指す)一朝此不測の變に至らば、頑民無賴の徒何等の大變牆内に可發哉と、日夜焦慮す。恭順の途從是破るといへ共、奈何せんその統御道なきことを。唯軍門參謀諸君、能くその情實を詳かにし、理其條を正さんと、且百年の公評とを以て、泉下に期するに在る而已。嗚呼痛しい哉。上下道隔る、皇國の存亡を以て心とする者少なく、小臣悲歎して訴へざるを不得處

なり。其御所置の如きは、敢て陳述するところにあらず。正ならば皇國の大幸、一點不正の擧あらば、皇國瓦解、亂民賊子の名、千載の下消する所なからん歟。小臣推參して其情實を哀訴せんとすれども、士民沸騰半日も去る能はず。唯愁苦して鎭撫す。果して勞するもその功なきを知る。然れども其志達せざるは天也。到於此、此際何ぞ疑を存せんや」

辰二日

此の一文を讀んで見ても、勝の心中にある忠誠已みがたき熱情は、十分に推察することが出來る。

慶喜は勝を召して、官軍を途中に迎へ、自分の恭順の誠衷を通じて吳れよといふ話があり勝もその氣になつて、一馬鞭を打つて出かけようとしたが、勝なくしては、江戸市中がどんな事になるか分らぬといふので、たうとうその事は沙汰やみとなつた。

それによつても、勝の一身といふものが、全江戸市民の生死に關して居つたことがわかるのだ。何といつても、勝は幕末の英傑である。

勝　安房

七　江戸開城は歴史の花

西郷の肚は、どこまでも戰爭をする腹であつた。何故といふに御一新といふやうな、國家の一大變革が、あまり氣安くトン〳〵拍子で出來あがるのはよろしくない。運だめし力だめし、ウンと手ごたへがなくては、新日本の力が出來あがらぬといふのが西郷の心である。

そこでウンと勢ひ込んで京都を出ると、三條の橋かなんかでもうその決心を涙にかへる一事件に引つかゝつてしまつた。

見ると一人の美しい尼さんが、橋のたもとに王師の堂々たる出陣を送つてゐるのだ。薩長の兵隊どもゝ、一寸變な眼をして見てゐたものゝ、京都には尊ふとい女性が尼さんにおなりになつてゐるから、迂濶には叱りとばせないのだ。

する中に堂々たる王師は、錦の御旗を樹てゝ進んで行く。恰度參謀大西郷が通りかゝると思ふと件の一尼僧が、怯くする色もなく、つか〳〵と西郷ドンの前に出て來て、

「王師出陣のはなむけに……」

といつて一枚の短冊を渡すのだ。

西郷ドンは不思議さうにその短冊を見ると、見事な筆蹟で、

打つ人も打たるゝ人も心せよ
おなじ御國のみ民ならずや

とすら〳〵と清水の流るゝやうに認めてある。

西郷は「ハッ」と心のひざを打つて尼僧を見やると、ハタとその眼を見た尼さんは、

「お分りですか……」

といつたやうな顏をして、いづくかへ立ち去つてしまつたのだ。この尼僧こそは誰れあらう當時洛中に其人ありと知られた大田垣蓮月尼であつたのだ

そこで、西郷ドンの心がしめつぽくなつてゐるところへ、勝が一生を捨てゝの哀訴狀が來る。

次には山岡鐵舟が、重團の官軍をつき拔けて、靜岡まで一氣に飛んで來て、舊主慶喜の哀情を訴へるので、西郷ドンの腹がうるほはない譯はないのだ。

いよ〳〵高輪で西郷と勝と向ひ合つて坐つた時に、西郷は刺客を脊にして舊主の爲めに大道を說く海舟の一身を打ちながめて、腹の中で「慶喜さんはよい家來を持たれたものぢや」と思つたことであらう。

開城の歷史は、悉く降伏の歷史である。史上にいろんな開城があるが、皆んな批難を殘さないものはないのだ。

日露戰爭の時に、旅順を開城したステッセル將軍も、いよ〳〵乃木軍が進入して見ると、猶一ケ月間は支へることの出來る彈藥糧食を持つてゐたことがわかつて、批難の的に立つたこともある。

勝の開城は、一戰もせずして西郷に降參してゐるのだが、後世誰れ一人、彼れを批難するものはなく、批難しないばかりか、彼れの行動は萬人の推稱するところとなつてゐる。

こゝを考へなければならぬ。人間の行ひの中で、何が一番貴いかといへば、至誠の行ひほど貴いものはないのだ。

勝は策士だ。策において決して他人に後れをとる人間ではない。その策士の勝さんが、誠

心を披瀝して西郷の前に兩手をついたのが、江戸百萬の市民の生命を助けたのである。策略ばかりでやつたことなら、勝さんの首は品川からの歸り道で、夙くに飛んでしまつてをつたに相違ないのだ。

八　英雄と英雄との對談

「昨年以來、上下公平一致の旨あれども、其中に私あり。遂に當日の變に及ぶものは、皇國人物乏しきに因る。就中伏見の一擧、一二の藩士を目して失錯あるは、我が最も恥る處堂々たる天下終に同胞相喰む。何ぞ其れ陋なるや。我輩忠諫一死を以て報ずべきに、已に其失前日にあり。今日何の面目あつて口を開かんや。然りといへ共、不日にして一戰數萬の生靈を損ぜんとす。其戰や名節條理正しきにあらず。各私憤を包藏して丈夫の爲すべき所にあらず、吾人是を知れども官軍猛勢を張り、白刃飛丸を以て漫に虛聲を假つて、怯弱の士民を劫さば、我も亦た兵を以て之れに應ぜんには、無辜の死、益々多く、生靈之塗炭、益々甚しからん歟。軍門實に皇國に忠する志あらば、宜しく其條理と情實と

を詳かにして後一戰を試みよ。我輩も亦能く其正不正を顧み、敢て漫りに輕擧すべからず。嗚呼我主家滅亡に當つて、一の名節大條理を持し、從容死に就くものなきは、千載の遺憾にして、海外の一笑を招く而已。我輩是を知れども、力支ゆる能はず、共に魚肉せらるゝ者は、深怨銘肝、日夜焦死し、殆ど憤死せんとす。憐れ其心理を詳察あらば、軍門に臨んで一言を談ぜん。幸ひに熟考せられば公私の大幸、死後猶生るが如くならん。謹言。

辰三月　　勝安房

參謀軍門

この手紙は慶應四年の三月十三日、西郷が高輪の薩藩邸まで進んで、戰か和か、今一兩日にして江戸市中が火となるか否かの境に、勝が西郷に送つた書簡であつた。

この血誠の現はれたる一書を手にした時、西郷は獨り打ちうなづきつゝ、勝の來邸を求めた。

いよ〳〵兩雄が對坐すると、先づ勝から口を開いて、一別以來の挨拶をした。

西郷は勝をみながら、

「勝ドン流石のおハンも、今度のことには、困却せられたでごわせう」
といつたさうだ。すると勝さんがニコリともせず、
「困まるか困まらぬか、見物人には分り申さぬ。先生が私の立場になられて見んければとても私の心はお分りはござるまい」
といつたところが、西郷はその時、ハタと膝を打つて、
「ウハハ、、、、、」
と大聲をあげて笑つたさうだが、この大笑ひが、感心笑ひといふものだ。
それから西郷が眞面目になつて、勝と開城の談判をしたといふ話だ。
翌日勝は更らに西郷を訪ふて嘆願書を差し出し、一段と熱情を込めて慶喜の恭順を延べ、明日の進軍を御中止あるべき旨を懇願した。
すると西郷は、
「承知しました」
と一語快諾を與へ、傍らにゐならんでゐた諸將に對して、嚴然として、この進軍を中止する

ことを命じ、自分は總督府に赴いて、その決裁を仰いだといふ。
その西郷の一心動ぜず、果斷明決、一點の疑心を挾さまぬのに、勝さんも頭を下げてしまつたさうだ。此の邊の光景になると、大丈夫と大丈夫との對談で、近ごろのやうな、二足三文の政治家のだまし合ひとは、まるで雲泥の相違だ。

九　申譯に腹を切るつもり

高輪における兩雄の會見で、大體の方針はきまつたが、幕下の諸士は、幕府側も、官軍側も、いきり立つて對陣してゐる。官軍の先鋒は、海江田、木梨(精一郎)などに率ゐられて、既に池上の本門寺まで進んで陣を布いてゐた。
幕府軍の方では、痩せても枯れても旗本八萬騎、眦を決して控へてゐる。殊に榎本武揚などゝ來ては、薩長何者ぞといふ肚があるから、一泡吹かしてやりたいので、腕が鳴つてしようがないといふ氣前だ。
いよ〳〵四月の十一日、官軍の諸將が江戸城に乘り込んで、城開け渡しの式をやらうとい

ふ前日、勝の心配は一通りではない。危機一髪に迫まつてゐるこゝで、若しも爭ひを幕軍から持ちかけるやうなことがあつては、それこそ、今までの苦心も立どころに水泡に歸する譯だ。

そこで勝は當日の引渡しは一切大久保一翁に一任して、自分は市中の動靜を探ぐつて、萬一のことのないやうに見廻りの役についたのだ。

四月九日に、勝は一翁と同道で池上本門寺に至り、當日は主要の人物三四人でお出掛けを願ひたいと申し入れた。

官軍が若しゾロ〳〵と繰り込んで來ては、どんな變動を起さうも知れぬから、成るべく西鄕外兩三名で乘り込んで貰ひたいといふ希望であつたのだ。

翌十日、勝が再び本門寺に行くと、前日の申し入れは、西鄕と協議の上、快諾することになつたから安心せよといふ答へであつた。

勝は成るべく電光石火、目にもとまらぬやうに、すばやく片づけんければ、寸前尺魔、どんなことが起らうとも知らぬと注意して引きとつた。

勝は馬上上野に歸つて來て、慶喜にお暇乞をして、そのまゝ自宅には歸へらず、夜中二回までも江戸城の周圍を警戒して廻つたのだ。

その中に、ほの〴〵と夜が白んで來た。その時勝さんが櫻田から新橋の方へかゝつて來ると芝の增上寺の方からお城の方へ向つて官軍が隊を組んで乘り込んで來るのに、ハタと出逢つてしまつた。

すると隊中の一兵が、勝の乘馬の轡をとつて誰何した。そこで勝は、

「自分は勝安房である」

と答へると、隊長らしいのが一禮して、

「御見廻り御苦勞千萬でムる、お通りあれ」

といつて、そのまゝ進軍して行つた。

それを見た勝が、非常に驚ろいた。あれほど堅く約束をして置いたのに、西鄕ともあらう者が、約を破つて兵を入れるとは何事だ。これはかうしてはおられぬと思つて、大急ぎで海軍所に行つて見ると、果せるかな、榎本以下が今にも對戰しようとする氣配だ。

兎角する中に益滿休之助が西郷の使として勝を尋ねて來た。

益滿がいふには、

「西郷先生の申さるゝには、兵を入れぬといふ約束であつたが、萬一役人に事があつてはと思つて實は護衛の一隊を繰り出して置いた。若しこれが爲めに變事を生ずるやうなことがあれば、吉之助一人その責任を負ひますとのことで、實はあなたの行衛を尋ね歩るき、やつとこゝでお目にかかりました」

といひ終るや益滿は飛鳥のやうに歸つて行つた。その後ろ姿を見送つて、勝は西郷の信と、義と、誠との厚つきに、思はず感涙を催ほしたといふ。

實は勝も、此日西郷の身邊に異變があれば、勝自から申譯けに腹を切るつもりであつたのだ。

一〇　五尺に足らぬ子鐵

「眞に西郷を知る者は我れ一人のみ」

と勝がいつたように、ほんとうに勝さんは西郷を慕ひもし敬しもしてゐたのだ。

明治十年の戰爭で西郷が岩崎谷一片の草露となつてしまつた時、勝さんの悲歎は、外の見る目もいたわしい程であつた。

夫れ達人は大觀す
拔山蓋世の勇あるも
榮枯は夢かまぼろしか
大隅山の狩倉に
眞如の月の影清く
無念無想を觀ずらん

……

と咏じた勝海舟翁の「城山」の一曲は、今では琵琶師の歌に上るのみとなり果てゝゐるが、あの歌ほど西郷の心中に澄み込んでゐるものは少ないのだ。

今も東京の西郊、洗足池に行くと、そこに勝さんが建てた西郷の詩碑が立つてゐる。

當時はまだ賊將隆盛だ。朝廷に對して恐れ多いといふので、殊に王城を離るゝ郊外に地を相して建てたのだ。

勝さんは、赤坂の氷川町に住んで餘生を送つてゐたが、當世に望みを絶つたお爺さんであつたから、いろ〳〵面白い話も多い。

明治政府が、御一新當時における勝の功績を表彰して、子爵を奏請したところが、

今までは一人前と思ひしに
五尺に足らぬ四尺なりけり

と諷したといふことだ。

爵位なんかは、固より眼中になかつたのだから、子爵であらうと、伯爵であらうと、そんなことは勝さんの胸の中には、何の重みにもならなかつたらう。

勝さんが或る時コレラにかゝつた話がある。コレラといふと昨今の東京市は、コレラの猛威におどろかされて、ツワリで物を吐いた女房でも、醉拂つて小間物屋をさらけ出した男でも、

「ソレ虎列刺だ」

とばかり避病院にかつぎ込むといふウロたへ方をしてゐるが、海舟のコレラのかゝり方は、また頗る振るつてゐる。

元來コレラに罹つたものが死ぬのは、吐いたり下痢をしたりして、體内の水分を皆な出してしまふから、水分不足を來たし、それが爲めに一命をとられるのだといふ。

それを聞いてゐた海舟が、コレラにかゝつたから、大いに奮發してしまつた。

「一體己れの意志といふ奴は、どれ丈けぐらゐ本物に出來てゐるか、こゝで一つ試してやらう……」

大變なコレラ患者があつたもので、發病以後といふものは、此の爺さん、吐きさうになるのをウンと辛棒して、何としても吐かない。コレでもかとこみ上げてくるのを、腹の底へおし下げてしまふ。

一方下痢をしやうとする奴は、尻の穴をウンと締めくゝつてしまつて、出やうといつても出させない。とう〳〵一滴も吐かなければ、一水も痢さなかつたので、コレラの方で、コレ

ラ溜まらぬといふので逃げ出してしまつたさうだ。
話が尻まで下つて來ては、勝さんにも申譯がない。先づこの邊のところでおしまひにしておかう。

徳川慶喜

一 十五代將軍

人間の力で、どうすることも出來ない力が、人間を支配してゐるぞ、とかやうに申さば、何だ運命論かと罵しる人もあらうが、それもよからう。

一人の力をもつて、一國を支配し世界を左右した英雄もあるが、その英雄がどこまで自然の力に抗してゐるか。ナポレオン大帝がモスクワの劫火を後にして、シン〳〵として降り積む大雪原の中を、馬蹄しづかにバリーに向つて歸る泰西名畫があるが、あの畫を見ると、大自然力の前における英雄の哀れさを、しみじみと思はしめらるゝのだ。

豐太閤の朝鮮征伐は、日本曠古の大偉業であつた。あの時秀吉公の思ひ通りにさせてゐたら鷄林八道はおろかなこと、支那、印度、蒙古、滿洲、南洋諸島から、オーストラリヤ邊まで、五三の桐の旗風に打靡いてをつたかも知れない。

少年にして猿面冠者、壯年にして羽柴筑前、老いて太閤關白となつて餘裕綽々たる精力だそのくらゐのことは朝飯前のことだつたらう。

人心既に平和を欲し、戰ひに倦む。これが文祿、慶長の人心だ。時の勢ひといふものには英雄も豪傑も抗することは出來申さぬ。一子秀賴に思ひを殘して、心の中で淋しい死に方をした秀吉を見て、我輩はつく〳〵大自然力、超人間力の偉大さを思はざるを得ない。

一天萬乘の尊ふときですら、心に憂ひは絶つことが出來ない。草に臥し露にぬれ、御袖のかわく間もなき後醍醐天皇もあらせられるのだ。

楠廷尉も「非理法權天」と旗印にかいて、最後の勝利を天に托してゐる。非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は權に勝たず、權は天に勝たずといふのである。

西郷南洲翁が「天を敬し人を愛せよ」といつてゐるのも、結局は天、絶大、大自然に反抗してはならぬといふことを教へてゐるのである。

征夷大將軍といへば、位人臣を極むるの高位高官である。天下のこと、我が世のこと、何一つとして我が思ふにまかせぬものなしと思はれる。我々平民どもから考へると、一日でもいゝから一度將軍樣になつて見たいと思ふが、さてその將軍が何ほど幸福かは、容易には決せられない。

朝から晩まで行儀作法の中で暮すのも一生、春夏秋冬肥桶をかついで、野天で夫婦のいとなみをするのも一生だ。

同じ一生にも千差萬別の形があるが、幸福は御殿の中にあるか、月を枕のうたゝねにあるかその邊のことは迂闊には申されない。

形で見て幸福なのと、心の中で幸福なのとは、顯微鏡で見ても更らに解り得るものではない。

女は氏なうて玉の輿、これほどの幸福が又と此の世にあるものかと謠はれもするが、不幸が輿の蔭に、すぐにまとふてゐることを知つてゐるものは少なからう。

徳川十五代將軍、一橋慶喜公は、人も羨やむ人臣の極だが、その一生は果して如何であらう。幸か不幸かは、本人の心になつて見なければ分らないが、これほど回りあはせのわるい將軍はなかつた。

二　惡い廻り合はせ

下駄となり簞笥となるも桐の運

といふ川柳があるが、同じ桐でも下駄となつては、人の足の下にしかれるし、簞笥となればお座敷に納まることが出來る。

同じ將軍でも、第一代の德川家康と、十五代目の德川慶喜とでは、下駄と簞笥ほどの身の上の相違がある。

家康の一生は、すべてが苦勞の世界、冒險の世界、奮闘の世界であつたが、山でいへば登り阪で、苦勞も冒險も一六勝負も玉の汗も、みんなが活々として光つてゐる。

慶喜の一生は、すべてが下り阪だ、ドン詰りだ。一生を通ずる不安の世界、陰影の世界、ドサクサ紛れの世界、何一つとして、明るみのない世界だが、そこが下駄の世界の回り合はせだから如何ともすることが出來ない。

人間の出來からいへば。慶喜は十五代將軍の中で、決して劣つた人物ではなかつた。

力は足りないが聰明といふ方では慥かに群を拔いてゐる。あれで三代家光ぐらゐの剛氣があつたら幕末維新歷史が、も少し波瀾萬疊の壯觀を呈してゐたらう。尤もその爲めに、少な

からぬ血の雨を降らしたに違ひない。

京都守護職を勤めて、幕府唯一の力となつた會津藩主松平容保が、

「慶喜も結構ぢやが、信念がないので困るよ……」といつてゐるのは、慶喜の智略あつて志操堅固ならざるを嘆じたのである。慶喜の片腕とも賴まれた人がかういふのだから、間違ひはあるまい。

後藤象二郎の入說を聽いて、「大政奉還」をやつたのは、たしかに大出來だが、慶喜にそれほどの大決心がなかつたのは、鳥羽伏見で戰爭をしてゐるのでもわかる。

どこまでも恭順で行けば、如何に勢ひが迫つても、鳥羽伏見で戰爭をして「朝敵」の汚名を蒙むるやうなことはしない筈だ。

三上參次といふ人は、餘り感心したことをいはぬ人であるが、

「鳥羽伏見で戰爭をしたのは慶喜公一代の拭ふべからざる大失態。あの時に私憤を洩らさなんだら、恭順一貫、立派な進退だつたに……」

と嘆息してゐるのは、やゝいゝことをいつてゐる。

山岡鐵舟が、慶喜恭順の意を通ずべく、靜岡に乘り込んで、官軍の參謀西郷隆盛に面會しようとした時にも、彼れは直接慶喜を上野東叡山に訪ふて、

「如何でござる。恭順の一心しかと相違はござらぬか」

と駄目を押してゐるので見ても、どうも腹の底がきまらぬ證據である。

明治十年の戰爭がボッ初まつた時、慶喜はノコ〳〵と靜岡から出て來た。まだ萬一にも德川の天下……を覘つてゐたのだといふ。

勝海舟は驚いて、

「今ごろあなたの出る幕ぢやござらぬ。早々お歸りなさいよ……」

と追ひ歸してしまつたといふ話さへ傳へるものがあるが、これは嘘だらう。

天下を薩長に奪られたと思ふと、恨みも出れば、癇癪も出るのだ。天皇親政、王政の維新が出來たと思つて默つて引き込んでゐるのが、慶喜の身上といふものではなからうか。

三七郎慶さま

慶喜の父は烈公である。といつたところで熊公の兄貴ではない。憚りながら德川さま御三家の筆頭は、水戸侯德川齊昭公である。

デロレン祭文でおなじみの水戸の御隱居「助サン格サン參りませう」と氣樂なやうな、意味のあるやうな諸國漫遊をやつた水戸光圀卿の末裔である丈けに、なか〳〵學問もあり、膽略もあり、嘉永、安政にかけての大舞臺は、烈公なしではお話もならぬくらゐの大立物だ。

烈公の下に藤田東湖があり高橋多一郎があり、光圀卿における助サン格サンのお役を承はつたので、烈公の威風が一層千代田城を風靡したのであるが、烈公自身も凡クラではないのである。

明治維新の一つの動機となつた米艦の渡來は、いふ迄もなく嘉永六年のことであるが、時の將軍家は、十二代德川家慶であつた。明君と申上げるほどの代物ではないが、さりとて暗君といふほどの凡人でもない。

十一代家齊將軍の華奢を戒しめて、勤儉力行に努めたことは、凡君でない一端を示してゐる。

黒船が來たころ、家慶將軍は病氣であつたので、近臣のものが遠慮して、この事を申し上げなかつた。

しかしいつまでも此の天下の重大事を祕密にしておく譯にもゆかぬので、初めてお耳に達したのが此の年の六月六日であつたといふが、それが爲一層病ひが重つて、その月の二十二日にたうとう御他界となつたのである。

家慶の後を享けて十三代將軍となつたのが德川家定將軍、此の先生は頗ぶる凡庸人で役に立たぬのは人間ばかりでなく、一生天の逆鋒も役に立たなかつたとかで、大奥の女官達がおもちやにしたとか、せぬとかいふ噂さもあつた。

將軍の逆鋒が立たうと立つまいと、そんなことは我輩には關係はない。併し人間が役に立たぬといふことは、當時天下の大問題である。

越前の松平春嶽の自記せる「逸事史補」の中に、

「溫恭公（家定）は凡庸中の最下等なり。衆人の思ふ所にては、天下多事の秋に當りて、斯る將軍の凡庸にては、天下を維持すること能はず。故に明將軍を立てんことを希望す。

予及び伊達宗城、山内容堂等も、天下の有志も、亦此の爲に大盡力を爲せり」と直筆してゐるので、家定の人物を一見することが出來る。そこで將軍儲君問題が起つて天下の大問題を惹き起したわけだ。

當時水戸烈公は家定の後見役であるから、先づ以て天下副將軍の形である。その烈公の第七子が、當時七郎麿といつて頗る出來がいゝ、幼にして發明、叡智、一橋家を繼いで一橋刑部卿慶喜となつたが、諸侯の眼光は、一齊にこの七郎麿に集まつた。

大老阿部正弘、越前の松平春嶽、宇和島の伊達宗城、薩摩の島津齊彬、これらの明君連が、口をそろへて慶喜擁立論を主張したのだから、何の苦もなく慶喜が將軍の跡取りになつたかといふと、却々さう氣易くラチがあかぬ。ラチがあかぬのみか、美事に失敗と成つてしまつた。そこに見遁すべからざる、大奥なるものゝ穴倉の勢力があつたのだ。

四　お世繼ぎ問題と大奥

女だからといつて、莫迦にしたまふな。クレオパトラの鼻の高さで、世界の歴史が變ると

いふではないか。

幕府時代における大奥の勢力といふものは、却々あなどれるものではない。外様から入り込んだ閣老なんどが、一つの苦勞は大奥問題だつたのだ。

家定將軍自身が、あまり七郎麿を好まなかつたともいふが、大奥の女中達はヒドク一橋を嫌つたのである。

それにはいろ〳〵の關係がある。一つは烈公の勢力が加はるのを嫌つたわけでもあるが、烈公自身に將軍家を覘ふやうな野心があつたかどうかは知らぬが、その勢力が內外に重望を負ふて、一に烈公、二に烈公といふ風であるのと、その烈公がひどく八ケ間し親爺と來てゐるので、この親爺さんが將軍の大御所となられた日には「わしや、嫌ぢや」ぐらゐのこゝろから、盛んに反對の火の手が揚つたわけだ。此の「わしや嫌ぢや」が莫迦にならぬ、流石の賢諸侯總がゝりも、この「嫌ぢや」でたうとうおぢやンになつてしまつたのである。

それには別に男の力も、勿論加はつては居つた。それはかの安政の大獄をやつてのけた井伊直弼だ。

井伊が烈公を嫌つたのは「嫌ぢや」といふやうな、單純なところからは來て居らぬ。彼れは男中の男だ。夙に開國論を懷いてゐたのだから、攘夷論の旗頭である烈公が天下の重きに居ることは、彼れの政策上に於ける一大障害と思つたのだ。

そこで大奥の空氣を早くも看破し、そこにつけ込んで、暗中の飛躍を試みた。

阿部閣老の考へは、それほど怖るべきものならば、手中に抱き込んで籠絡するに越したことはない。といふ考へで、桂太郎式のニコポン政策を用ひたのだが、一徹者の井伊は、そんな圓滿達德なことは出來ない。

何でも棒はぬ、天下の禍ひになる奴は、片つぱしから叩き殺すに限るといふ一本調子の男だから、どこまでも烈公排斥を主張したのである。至極單純な男だが、その單純の頭に、力といふ武器をもつてゐたので、猪が山巔から飛び下るやうに、突進して行つたのだ。

一橋擁立問題は、阿部時代から起り、その時代は先づ順調といふ方に向つて居つたが、阿部が腎虛で若死をしてから、惡氣流に向つた。

井伊がいよ〳〵大老となると一橋擁立の根も葉も斷ち切つてしまつて、紀州家から嗣子を

迎へることにした。これが十四代將軍となつた、德川家茂だ。

かういふ關係から、慶喜は嗣君問題の中心に立たせられたので、隨分と敵もつくり、反對もせられた。

何も慶喜自身のしたことではないが、運の惡いのは致し方のないもので、知りもしない仇を作つたり、思ひもよらぬ敵を作つたりしなければならなかつたのだ。

當時家茂を樹てずに、賢明の名ある慶喜を樹てゝゐたら、どんなになつたか、結局はどうにもならなかつたにしたところで、少しはどうにかなつたかも知れぬ。

五　ねぢ上の酒呑み

氣の向かぬ長州征伐をやつてゐる中に、十四代將軍家茂は大阪で不歸の客となつた。慶應二年七月二十日の朝だつたが、まだ二十一歳の若盛り、月末勘定の苦みや、一六銀行の利上げにこそ心配はしなかつたが、天下國家の苦勞で、果敢なくなつた將軍さまも、まことに以つてお氣の毒な次第だつた。

江戸城にお留守居をしてゐられた御臺和宮は、まだ十八の花盛りを、むごたらしくも一夜にして剃髪、靜寛院となられて、悲しみを分たれた。

穴蟬の唐をり衣なにかせむ
綾も錦も君ありてこそ

三津瀨川世のしがらみのなかりせば
君諸共に渡らましものを

と詠ぜられた宮の御心中を察し奉つると、七三耳かくしが宿六のゴネ玉ふを壽ほぎまつるのとは、大した相違である。

家茂將軍の歿後、又々持ち上つたのは將軍の後繼者の問題だ。當時慶喜サンは三十の男盛り、それに京都の守衛總督をつとめて、押しも押されもせぬ京攝間の大立物となつてゐたのだから、こゝまでくると、もう慶喜を十五代將軍に押すのに誰れ一人反對するものもない。

萬口一致、慶喜推戴といふことに決したが、こゝで慶喜が二つ返事で乘り出すやうなお人好しではない。

考へて見れば、もうこの切端つまつた時勢では、先きは見え透いてゐる。飛んで火に入る夏の虫、慶喜サンになつて見れば、飛んだ苦勞をするのは、まことに以つて莫迦々々しい話だ。

誰れが何とすゝめても、ウンと承知しない。承知しないといつても、外に人物がないからどうでも慶喜を祭り上げる外はないから、手を換へ品を換へて勸奬した。松平春嶽の如きは、

「慶喜はネヂあげの酒呑みぢやから……」

といつて、一筋繩ではゆかぬと覺悟したが、いかにネヂあげても、結局呑むことは呑むと見當をつけたから、ドシ〳〵詰め込んで行つた。

慶喜にして見たところで、莫迦々々しい苦勞をするより、ゆつくり晝寢でもして、風鈴の音でも聞いてゐた方が、どのくらゐ呑氣だか分らないには相違ないが、さりとて絶世の美人を押しつけられては、滿更でもあるまい。

將軍もいゝが、第一大姑小姑がガヤガヤいつては仕事は出來ない。そこでネヂあげて「どうぞ〳〵」で頭を下げさして、グウの音も出なくしておいて、さて、

「然らば將軍は別物ぢやが、家康公以來の宗家の跡とりがなくてはならぬから、折角のおすめぢや、跡目丈けは相續いたさう」

やつとの事で德川家だけは相續したが、德川家は相續するが、將軍家は御免だといふのもチト筋の合はぬ話である。

その年の十二月まで引きのばして、萬やむを得ずといふ見えでたうとう十五代將軍德川慶喜將軍となつたのだ。

なか〳〵もちまして一筋繩でゆくやうな男ではなかつた。

六　因循姑息の効用

家茂將軍が亡くなつて、まだ間もないころ「出る杭は打たれる」といふ理窟を、チャンと肚の中におさめて慶喜サンは靜かに退ぞいて、天下の形勢を見てをつた、その折のことだ。

馬鹿殿樣でも、生きてゐる間は、どんな惡人でも無暗に横領は出來ない。ところで代の變

り目といふのが、險呑なところだ。我々平民でも同じこと、まして將軍家の代がわりと來ると肝心かなめのところだ。

そこで、こゝが覘ひどころだといふので、一擧にして倒幕の運動を起さうとしたものがある。それは誰れあらう、薩摩の大久保甲東だつた。流石は機を見るの敏なるもので、こんな氣合ひでも大久保が時務を見る俊傑たるの風丰が見えてゐる。

そのころ鹿兒島に歸つて、芋掘りをしてゐた西郷に手紙を出して、

時は今天が下知る皐月かな

といつたやうな通告をしたものだ。

すると西郷が山の中から返書を寄した。その返事が大久保とはまるで違つてゐる。西郷がどんな云ひ分をしたか、大たいかういふ意見だつた。

「お前サンは、將軍が死んだので、今にも德川が倒れるやうにいはつしやるが、おいドンの見るところでは、まるで反對ぢや。德川の天下といふものは、今倒れやうとしてゐるのではなくて、續かうとしてゐるのでごわすヨ。將軍家の死は、何といつてもおいたはしい

ことで、いくら德川が氣に入らぬといつても、將軍家が死んだといふので、手を打つて悅ぶものはあるまい。そこは人情と申すもので、矢張り天下一般に悲しさうな氣になつてゐる。それに慶喜は悧巧な人ぢやから、ジッと退ぞいて人望を集めてゐる。どうやら世間の同情は、德川家に注がれてゐるやうな氣がするのぢや。人の弱り目にツケ込んでからに、搔つ拂ひのやうな眞似をするのは、大丈夫の心ではござるまい。こゝは先づ慶喜を將軍に押し立てゝやつて、充分彼れに腕を揮はせて見るがよい。いづれその中には尻ッポを出すであらう。さすれば自然に天下の人氣を失ふ。そこで我々が初めて矛を執つて起つべきでごわせう……」

これがその時の西郷の手紙の要領である。ナント立派なものではないか。これには流石の大久保も一言もなかつたといふことだ。何としても西郷は西郷だけのものはある。

慶喜サンが矢張りこの邊の呼吸で仕事をしてゐる。もう家茂の跡目となつて見れば、慶喜でなければ……とは、誰れも彼れも一致してゐる輿論だから、默つて居つても、自然に落ちる處に熟柿は落ちて來るのだ。それを「俺が今度は將軍になるのだ！」と自から肩を聳や

かして出て來たのでは、收まるものが收まらなくなる道理。喬木は風に當り易し。衆望の歸するを待つて、やをら立ち上るところに、熟慮もあれば、用意もあるといふものだ。

いよ〳〵將軍となつた慶喜が、こゝで一つ大きな仕事を片づけて、將軍としての地位を、確乎不動の基礎の上にデッチあげようとしたのが、例の長州征伐の跡始末だ。

長州征伐といふのは、前將軍からの繼續事業で、高が防長の二州だ。德川將軍の威力でもつてからに、ポンと突けば、コロリと倒れると思つたのが抑々のあやまり、名妓高尾に振られて味噌をつけた、仙臺の伊達サマ以上に大味噌をつけた。その跡始末をどう慶喜サンが手をつけるか。こゝが人物の斤量の秤り目である。

「しまつた！」

と思つたら、直ぐに手を引けばよい。そこをあゝでもあるまい、かうでもあるまいと、いろ〳〵にコネくり廻すから、段々と深味に入つてしまふ。遂にはその身を滅ぼした例は道ばたにゴロ〳〵してゐる。

こゝで慶喜サンが、そのまゝ默つて手を引けばよいのに、一ッ餘計なことを考へた。餘計

なことといふのは、こゝで一度は新將軍の威力といふものを見せておかうと考へたことだ。

そこで自から戎衣を纏うて出征もし、一度は長州を叩きつけておいて、それから媾和談判をすまし、さしも久しい、もつれであつた征長のケリをつけようと考へたのだ。

ところが遣り掛けて見たが、案の定、思ふやうに行かぬ。思ふやうに行かぬのみか、チンデ戰ふ意志のない諸侯を率ゐてゐるのだから、事毎にボロを出した。

そこで春嶽、容堂、久光、宗城のお歷々の四侯が京都に乘り込んで來て、

「長州征伐のことは、どこから推しても無名の師だ。それにどちらかといへば、今日のやうな騷動を引き起したのも、元はといへば幕府にも手落ちがあるのだから、コ、はあつさり許してやつた方がよからう」

と忠告をした。ところが慶喜サン、なか〳〵頭を下げぬ。そこには矢張り意地といふものもあれば、行き掛りといふものもあるのだ。

その意地の行き掛りを一掃してしまつて、天下の大義にもとづき、男らしく頭を下げるといふやうな、大悟徹底した行動をとるには、慶喜はあまりに眼先きが見えもし、また小才が利

きすぎもした。

その頃、一方では西郷、木戸、坂本等の薩長連合も出來てゐるし、今にも倒幕の軍を起さうといふ差し迫まつた折であつたから、薩長側では、むしろ慶喜が强情に出る方が都合がよかつた。

慶喜サンは對手によつて、意見が變つたといふことだ。自分で意見の立たぬ凡倉ではないけれども、人から智惠をつけられると、その方へ變りやすい。

とかく因循姑息だとの評判が立つたなぞも、意見の變り易いところからも來てゐる。井伊大老のやうな、英斷、果斷、猛斷、暴斷をやるんであつたら、鳥羽伏見どころか、到るところで血の雨をふらしてゐたに相違あるまい。そこになると因循姑息の効用も、まんざら捨てたものではない。

七　大政返上の一幕

土佐の後藤象二郎といふ男は、坂本のやうな策士ではないが、兎かく大物食ひの大豪傑だ

つた。

平地に波瀾を起したり、隻手よく天下を覆へすといつた風の、芝居がゝりで物事をするのが好きであつた。從つて彼れの一生は、飛躍的であり、颶風的であり、山師的であり、破天荒的であつた。

薩長が連合をして、今にも倒幕の軍を起さうとしてゐる。新たに乘り出して來た岩倉友山は、今にも倒幕の密勅を鷲掴みにして、淺黄の幕を切つて落さうとしてゐる。

この危機一髪の際に當つて、疾風のやうに現はれて來たのが、後藤の大政奉還論だ。

後藤は先づ幕閣をウンと脅しつけておいて、二條城で慶喜と對談して、一世一代の大雄辯を揮うたものである。

「薩長の肚はもう倒幕にきまつてゐます。愚圖々々してゐれば、朝敵になるのは請け合ひ、そこでこつちから薩長の裏を搔くには、スポンと將軍職を擲げすてゐに限る。朝敵の汚名を受くるか大政奉還の美名をとるか、今、あなたの決心次第で、いかやうにもなりまするぞ、寸刻をも爭ふ場合でムる。熟慮よりも斷行々々……」

と威猛高になつて詰めかけたところは、後藤でなくては出來ない大芝居である。

後藤の入説がなくとも、もうその時は慶喜の肚がチャンときまつて居つた。が、例の因循姑息病で、それを決する時機を知らなかつたのである。

「わしの代になつて、徳川三百年の宗家を潰ぶすといふのも、氣の利いた話ぢやない。祖先に對してまことに申し譯もなく、面目次第もない話ぢや。がしかし、考へて見れば、これも時勢で致し方もござらぬ。この上、わしが、頑張れば頑張るほど、徳川氏が窮地に落ちるばかりか、國家の爲めにもならぬ。こゝは潔よく大政を朝廷へお返へし申しあげて、私を殺して公に奉ずることが、唯一の御つとめぢや」

と考へるくらゐの利發さは、慶喜サンにある。それが後藤の雄辯にあつて、いよ〳〵の臍を堅めた譯だ。

或る一説によると、後藤が慶喜に説いた時に、一寸味なことをいつた。

「いよ〳〵大政の奉還をなされば、あとは上下兩院を建て、公議輿論によつて政治を行ふことになるのは申す迄もムらぬが、そこで貴君をその主裁者に推薦する考へでムる。して見れ

ば、表面は將軍家の滅亡であつても、裏面は實勢力の把握でムる。こゝのところをトクとお考へあれ……」

と猫なで聲を出したので、慶喜はそれを眞に受けて、返上の決心をしたのだともいふが、勿論それもあらう。しかしそれを宛てにして冠りをぬいだとは思はれない。

根こそぎ、將軍家を叩き潰すのではない。將軍は廢しても、徳川は一諸侯として、天子樣に忠義をつくす分には差支がないのであるから、臣民として君に忠なる道においては、政治總裁になつても、なれなくても、いくらでも盡す道はあるのだ。

慶喜がいよ〳〵大政返上の下書きを後藤に見せた時、後藤は大よろこびで、旱速坂本龍馬に知らしてやつた。大政返上では坂本が先生だからである。

將軍はいよ〳〵大政奉還に決し、奏聞勅許を經て、天下に公やけにすることになつた。こんな嬉しいことはない。洵に以つて千載一遇の悦び、萬民の慶福ぢや」

とまづ、こんな風な書き振りだつた。

その手紙を受けとつた坂本が、兩の手をあげて「バンザイ！」と怒鳴るかと思ひきや、手

紙の半分ほど讀みかけて、さめざめと泣き出したものだ。

「慶喜サンの心中になつて見たら、どんなであらうか。お察しします」

といつて、しばしは顔もようあげ得なんだといふ話。こゝだ、人間にはこの至情がなければ荒れ野の原のやうなものである。

八　苦るしい立場

慶喜サンがまだ鼻垂れ小僧の時に、おやぢサンの烈公がひどく可愛がつた。可愛がるのはよいがそれが並み大ていの可愛がり方でなない。何しろ豪傑烈公のことであるから、隨分猛烈な可愛がり方をやつたものだ。

「七郎麿さま、おやすみ遊ばせ……」

侍女たちが案内をする。麿の七郎がねると、侍女が剃刀を持つて來る。コレは物騷なものを、何にをするかと思ふと、寢てゐる七郎麿の兩方の頰のところへ、二本の剃刀の刃をむけて立てたものだ。ずゐぶん亂暴な話だが、別に寢小便のおまじなひではない。

「武士たるものゝ子は、寢た間も正相をかへてはならぬ」

といふ烈公の命令だつたといふ。飛んだことをする親爺もあつたものだが、そこは封建武士の氣魄である。この調子で七郎麿を可愛がつたのだから、可愛がられた方で溜まつたものではない。とはいふものゝ「艱難汝を玉にす」だ。慶喜も持つて生れた英發の上に、烈公の荒砥にかけられて磨きあげられたのだから、一段の光を增したわけだ。

鳥羽、伏見の戰爭、あれは何としても慶喜一生の不覺である。精悍を以つて天下に誇つた會津武士を初めとして、桑名藩や幕府旗本の勇士が、何で薩長の奴等にオメ〳〵天下を取られて溜まるものか……と突つかゝつて來るのを、敢へて不忠義者として逆賊あつかひにするのではない。彼等が切齒扼腕するには、又たそれ相當の理由もあり、考へ直して見れば、武士の面目、已むに已まれぬ意氣地ではある。

かく申す我々とて、當時德川三百年の恩顧を受けて居り、幕臣として將軍にお仕へ申してゐたならば、或ひは大いに一矢を酬ゐたかも知れぬ。いや、酬ゐられずにはゐられなんだに相違ない。

しかしながら「大義親を滅す」とはこゝのことだ。徳川家に對する恩顧、それは私の上のことだ。大義公義においては、一天萬乘の君を戴き、一意忠誠を披瀝し奉まつらねばならぬことだ。

考へて見れば慶喜の立場は苦しい立場であつた。會津、桑名の勇士を引き止むる丈けの力が慶喜には足りないのだ。そこで士卒の方では「慶喜なんか賴みにならぬ」といふ氣になり慶喜の方では「そんなにいふことを聞かないなら、どうにでも勝手にせよ」と、捨て鉢な氣を起してしまつた。

それがそも〳〵鳥羽伏見の戰爭の起りだ。敗けた會桑の兵が、ドン〳〵大阪城に集まつて來る。見る〳〵中に黑山のやうになつた。これらの敗兵は大阪城の金壘に立て籠つて、こゝで官軍と大血戰をするつもりだ。大阪城中の閣老の意見も、誰れ一人をめ〳〵降參しようといふものはない。

そこで慶喜がこれではどうもならんと考へたので、サッサと大阪城を夜遁げしてしまつて當時天保山沖に碇泊してゐた幕府の軍艦開陽丸に移つて、明日は南海熊の浦、鯨汐吹く紀州

灘、遠州、相模を乘り越えて江戸へ歸つてしまつた。そのすご〳〵と江戸城に歸つて行つた慶喜の心情を察すると、思はず涙が頰をつたはる。

殘された大阪の士卒が、あくる日になつて藻拔けの殼となつてゐるのを知り、地團太ふんで口惜しがつたといふが、大勢去つては致し方もない。

慶喜サンにして見れば、いろ〳〵の思ひで胸の中は一パイであつたらうと思ふのだ。江戸城に歸つて、初めて前將軍の御臺サマ、その昔の和宮、今は髪を下ろして靜寛院サマにお目通りをしようとして、

「慶喜が思はざるの手違ひから、一たび朝敵の汚名を蒙むりましたが、これにはいろ〳〵と深い仔細もあることでムりまして……」

と、人には語られぬ胸の中の祕事を打ち開けて、せめて宮サマのお心丈けには、自分の心をお話し申しあげておかうとしたところが、その時宮には、

「いかなる事情のあるにもせよ、既に朝敵とある上からには、お逢ひ申すことは叶ふまじ」

と、一應はお應り遊ばされたさうだが、そこは流石に大義に明らかに在はす和宮サマだから

私情と公義とを、混同は遊ばされぬ。

そこで慶喜からいろ〳〵に事情を申しあげて、やつとの事でおくつろぎ遊ばされ、土御門藤子を宮様の御使ひとして京都にお遣はしになつて、慶喜の罪をお許しあるやうに、歎願書までも副へてお願ひをされてゐる。

ところが江戸城中では、主戦論者が多く「薩長討つべし」と猛り立つて、まるで鼎の湧くやうにゴツタかへしたのだ。

徳川慶喜をして、こゝはどこまでも恭順せしめ、天朝に對する臣子の本分を完うせねばならぬと唱へるものもあり、一方では薩長は、官軍々々といふけれども、天子様を擁して天下を簒奪した輩ではないか。我々はどこまでも徳川を擁立せねば、武士の一分が立たぬ、といきり立ち、連日連夜の大論争をつゞけたものである。

その血煙たつた論戰の中を、慶喜はどこまでも恭順の意志を固め、上野の寛永寺に入つて大慈院内に屏居してしまつた。これとて勇者でなくては出來ない行ひだが、その心中は悲風千里、霜に紅葉の散るやうなものがあつたらう。

花もまた哀れと思へ大方の
春を春とも知らぬわが身を

當時慶喜が上野の山での述懐の三十一文字である。もうかうなつては、春もなければ秋もなく、人生の綾も錦も過ぎ去つてしまつてゐるのだ。

九　烈公の庭訓

狂歌の大倉喜八郎ドンではない。論語の澁澤榮一サンの方だ。あのお婆サンだかお爺サアだかわからぬやうな顏の榮一サンは、もとは幕臣だつた。そして慶喜サンには近侍してゐた關係もあり、いろ〳〵深い間柄で、その澁澤の話の中に、慶喜の勤皇心を察するに足る一節がある。

明治三十四年ごろのことでもあつたらうか、西班牙から、何とかいふ王族が來朝したことがあつた。その時、王族の歡迎會が、有栖川宮サマの邸で催ほされた。當時の席上には朝野の名士やら貴顯やら紳士やら、雲のごとく集まつたが恰度伊藤博文と徳川慶喜サンとが席

をならべて座について居つた。

伊藤は時の總理大臣だつたが、何でもこの年の五月ごろだつたと思ふが、總辭職をして後は西園寺に讓り、自分は九月の中ごろに、歐米漫遊と洒落れたものだ。この時、慶喜と席をならべて、酒間、いろんな雜談をかはしてゐた。

いつの間にか王族は歸られてゐる。ボッボッ客も立ちかけてゐる。

「昔のことを思ふと夢のやうですネ……」

伊藤は、思ひ出したやうに、慶喜に話しかけた。

「慶喜サン。あなたが御一新の始めに、勤皇の大義に出でられてからに、終始一貫、恭順を通ほされたのは、ホト〳〵感服いたしてゐます。時にこれは何か、深い御趣意のあつたこと〻存じまするが……」

慶喜は、今ごろ何を聞くのだらう。時候遲れの挨拶を聞くやうなものだナ……としかめ顏をしながら、

「これは又た、改めてのお尋ねで、恐縮の至りぢや。ナニ、別に奇妙不思議の因緣がある譯

でも何でもムらぬ。たゞ代々の庭訓を守つた丈けのことでござつてのウ……」

至極氣輕な返詞だつたが、その「庭訓」といふ言葉がこの場合、妙に伊藤の胸に響いた。

「ホ、ウ、庭訓でござるテ。それは初耳でござるが、何ですかナ、烈公の御嚴命で……」

「いや、父ではござらぬ。これは義公以來の庭訓でござつてナ。宗家も大事に違ひない。違ひないが國家の大事は皇室ぢやョ。若しも將來、宗家と皇室との間に、何か事でも起つて、弓矢でも執るやうな場合がござつた際は、どんなことがあつても、朝廷に弓を引いてはならぬ。といふ一節がござるのぢや。これは代々水戸家に傳はつて居つて、わしが一橋家を繼いだ折にも、烈公から特にこの一條は御申聞があつたのぢやで、それを後生大事に守つた丈けのことでござるよ」

伊藤は慶喜の話を聞きながら、

「ナル程、流石は大日本史を作つた義公丈けのことはあるわイ」

と、肚の中で、感心して聞いてゐる。すると慶喜サンは、尙も語を繼いで、

「ところで伊藤サン、こんなことは面白いことではないでのウ……それよりは源平須磨の戰

ひの方が面白いから、庭訓なんかはすぐに忘れてしまふ。小供のころは、別に氣にも留めなんだ。それから……忘れもしないわしが二十になつた折のことぢやつた。小石川のお邸に出ると、お父サマが今日は妙にいかめしい。「これへ」と仰せられるので御前に正座すると、形を改めて申されるには「時にノブヨシ、今日の國家と申すものは、さてどうなるものやら、まことに心もとなくてならぬ。就いては、常に訓へておいた、義公以來の庭訓の一條、アレを決して忘れてはなりませぬぞ」と仰せられた。その時の言葉が妙に強くわたしの頭に響きましたのぢや。元來、親の意見なぞいふものは兎角、耳に入らぬ勝ちのものぢやが、この時ばかりは、燒ゴテを押されたやうな氣がしましたよ。それで御一新の時に、コヽゾと、考へたから、その通りやりましたまでぢや……」

かう話をされた。それに伊藤がひどく感心した。感心したといふのは、義公以來の庭訓に感心したのでもなければ、また家憲をよく遵守した慶喜サンを偉いと思つたのではない。慶喜が自分の手柄にせずに、一切を庭訓に歸して、自分のことを一言もいはないところに感心したのである。

人間といふものは淺墓なもので、兎角自分の仕事を大袈裟に吹聽したがるもの、中には人の手柄まで、自分の力に歸して、囃し立てるものもある。そこを慶喜が大昔しの手柄にしてしまつた。

「矢張り、慶喜公は常人ではない。あの時の話で、僕はつく〴〵さう感じたことでしたよ」とかう、澁澤と何かのことで、東海道の汽車を共にした時、列車の中で、伊藤が懷舊談をしたことがあるといふ。これは澁澤の直話だ。

勤皇の大義なぞは、トクの昔に學問したと、自分の發明を表はさぬところに、奥ゆかしさがある。そこをいはぬところに、慶喜の人物がほの見える。

十月に昔の影

幕臣の中でも、隨分慶喜の惡口をいふものがある。德川の潰ぶれた鬱憤が、どうしても慶喜の頭にかゝつて來るのだらう。

慶喜が不甲斐なかつたばつかりに、みす〳〵薩長に天下を取られてしまつたのだ。勤皇な

んていつたところで、實は薩長が朝廷を擁して、一六勝負をしたまでのことでないか。錦の御旗だつて、朝廷からほんとに下されたものぢやなくつて、長州あたりの山の中で、自家製造をやつたものなんだ。だから藪の中から錦の御旗が、突き出たりするのだ。何も彼も本當にあてになつたものぢやない。……と憤慨するのにも、一理はある。

今日の大御代から考へるからこそ、皇政は國體の基本であり、天下の大義であることが、一目瞭然だが、トコトンヤレの當時では、まだ〳〵將軍家あつて、朝廷のあることを知らなんだものが多かつたのである。

その德川家が、華々しい戰爭もしないで、オメ〳〵と降參してしまふのは、氣の腐る話に相違ない。

慶喜サンが第一氣が利かん。何かにつけて因循姑息だから駄目だ。も少し頑張り力があれば薩長の田舍侍の鼻をあかすぐらゐのことは、何でもなかつたのだ。

かういふ考へは、一時、幕臣の誰れもが、持つところの、一ッの感情であつた。何しろ相撲に負けて、腹が立つてゐると言ふところである。

そこへ行くと勝海舟、山岡鐵舟などといふ人物になつて來ると、流石に一段と見識が高かつた。

上野の大慈院にシケ込んでゐる慶喜に、ほんとうの決心をさゐさしたのは、鐵舟だといはれてゐる。慶喜の命を含んで、靜岡まで飛んで行つて、征討大本營まで乘り込んで行つて慶喜恭順の眞意を傳へたところなぞ、流石は旗本隨一の剛の者、山岡鐵舟だから出來た仕事である。

江戸城開け渡しの勝海舟、一段の男振りをあげた。「進メ〳〵」と號令をかけるのなら、お山の大將でも出來るが、千早、笠置の城を守るとなると、惡太郎では出來ない。

勝が西鄕の手を握つて、「天下の英雄、使君と我れのみ」といつたやうな談判をしたのは、維新歷史中の華である。

かういふ傑物が居つたから、德川に疵がつかずにすみ、日本に疵がつかずに濟んだといふもの。こゝになると、なくてならぬは明識卓見の士である。

同じ幕臣同志の中からは、勝や山岡は、犬侍だの、二股武士だの、腰拔け武士だのと罵

られもしたが、本氣で戰爭をするつもりなら、勝の智謀、山[illegible]の剛勇を以つてすれば、箱根以東には、一歩も官軍は入れなかつたかも知れぬ。

そこを涙を呑んで、一身の榮辱を捨て去つてゐる兩雄の苦衷といふものがあるのだ。慶喜サンも、考へて見れば、いゝ家來をもつたものである。

取分けていふべき節はあらね共
たゞ面白くけふも暮らしつ

慶喜サンの述懷の歌だ。どこやらに、淋しい心の蔭がたゞよふてゐるが、そこに何ともいへぬ思ひが籠つてゐる。

導けば導く方に流れくる
水はをしへの親とこそなれ

水は低きについて流る。大勢に抗せず、なるやうになり、ゆくやうに行く。

「夫の天命を樂しんで又た何をか疑はん」

といふ心持ちが、大學でノートに筆記するやうな修養で出來るものではない。

眺むれば古りにし事の浮び來て
月に昔のかげも見えけり

淋さを軒の雫に殘しをきて
また誰が里に時雨ゆくらん

慶喜サンの歌には、どれでも何處となく哀音が流れてゐる。淋しさがたゞよふてゐる。秋風に堪えかねて、虫の音の、草葉の末に枯れ〴〵と消えゆくやうな、はかなさがあり、切なさがある。

十五代將軍、德川慶喜公、その人も死んだ。慶喜を倒して大臣參議となり、位ゐ人臣を極めた人々も、今では相前後して黃土と化し、冷たい土の下で眠むつてゐる。人生は善惡もあり愛憎もあり、波瀾萬疊であるが、一たび天の命數の前に立つと、萬人一樣、甲もなく乙もなく、西もなく、東もない。こゝに釋尊の大宗教も生れてくれば、老莊無限の大哲理も出て來るのだ。道は天地自然の中にあつて、遠く且つ大なりである。君よ、月給が少ないぞといつて、みつともない喧嘩をし玉ふなかれ。

西鄉南洲

一　俺らが國さて西郷ドン

「俺らが國サで見せたいものは、昔しや谷風、今ま東郷平八郎」

と、薩摩人の唄に聞いた。そこで或る時拙者が即吟をやつた。

「俺らが國サで見せたいものは、一に富士山、二に山櫻、三に西郷吉之助……」

藝者なんぞの三味には、固より合はないに決まつてゐるが、東海君子國、日本男兒の意氣を、青天井に吹きあげたつもりだ。

「西郷サン」と聞いたゞけでも、肚の中がすつきりするやうな氣がする。「大西郷」と來れば山又山の青嵐が、尻の穴まで吹き通したやうな壯快味がある。

昭和二年は、西郷サンが城山で殪れてから、恰度五十年目に當るといふので、鹿兒島では盛大な南洲祭が催ほされてから全國の新聞雜誌に、今では西郷ばなしの出ないことはないといふ繁昌だが、サテ世態人情はと見ると、西郷崇拜熱とは似もつかぬ、途方もない方角へ飛んで行つしまつてゐる。

人間が變はつて行くのだ、世の中が變らぬ筈はない、亂頭粗服、肩で風を切つて大道狹しと濶歩し、

衣肝に至り、袖腕に至る。腰間の秋水、鐵斷ずべし……

と、往來の子守り娘を慄へ上らした、當年の豪傑書生も、今や、土うづ高き青苔の下に、覺めざる眠りをむさぼつてゐる。たまに殘つてゐる者もあるが、唐草模様の花服を著て、蓄財に餘念がないといふ次第だ。

若い男と女のことだ。戀し合つたり合はれたり、蝶よ花よと戯むれるのに無理はない。青春再び來らず、落花重ねて枝に歸らずで、する丈けのことをするに越したことはないが、モダン何とやらが、七三耳隱しで、恥もかくさぬ亂行を見ては、天下遊俠の士ならずと雖も轉た亡國の嘆なきを得なからう。

功名富貴を望めといふのではないが、苟くも生を男兒に享け、臍下三寸、鬱蒼たる大森林のあたりに、不屈の大勇を養ふ以上、立つて風雲を叱咤するの志望ぐらゐはあつてほしいものである。

泣いて過ごすも五十年、笑うて渡るも五十年、どうせ一度は死ぬものと極まつてゐるからには、生死は敢へて恐るゝに足らぬ。思ふ存分男性の勇壯美を發揮すべしである。

脊廣のポケットから白いハンカチを二分通りのぞかせ、オールバックでしやなりと出掛け、女に優しくするのみが、必らずしも惚れられる所以ではない。

女は弱い蔦かづら、亭々たる老松にからみついて、いとも妙なる花を咲かせるもの、柳の枝に藤の花は咲かぬと知つたら、炎天に、寒風に、烈日に、氷雪に、身心を練り上げて、顏は赤銅の如く心は雪の如く白くして置くことだ。

東は東京、西は西京、女は愛嬌、男は度胸といふではないか。先づ以つて度胸の製造が何より急務だ。鎌倉の由比ケ濱に、蒙古の使者を斬つて捨てた、北條時宗の劍のキッ先きには既に元軍十萬の頭を斬るの意氣があつたのだ。

頼山陽が「相模太郎、膽、甕の如し」と稱賛したのも、流石に英傑を知るものゝ言と思はるゝが、その時宗でさへ、名僧について平生の修養を怠つては居らぬ。祖元禪師が「電光影裡春風を斬る」の一喝に、時宗の決心がついたのだが、一夜づくりでこの名劍の斬れ味は出

て來ない。

二　維新三傑の筆頭

誰れいふとなく「維新の三傑」といふ言葉が出來た。西郷南洲、大久保甲東、木戸松菊をあげてゐる、二人は薩州、一人は長州である人物の配置からいふと、少々物足らぬところもあり、天秤棒が片チンバに傾むいてゐる氣味合ひもある。

こゝで無くてならぬのは、岩倉に三條の二公卿で、先きの三傑と加へて、維新の五傑として、初めて維新の歴史が語られる。しかし德川の方でも人物がないではない。慶喜、勝海舟この二人もなくてならぬ人傑だ。かうなると、三傑が五傑となり、五傑が七傑となり、七傑が何傑となるかきりがなくなる。

サテ維新の三傑をずらりと並べて見たところで、何といつても西郷の第一位は動かぬところだ。人間には、大概の場合、毀譽褒貶が伴ふ。萬世を通じ、古今に亙り、批難のない人物は、殆んど稀れだが、その稀れなる中の、稀れなる人物に、俺らが國さの西郷南洲がある。

西郷ドン……といへば、既に御一新のころに、推しも推されもせぬ大人物であつた。二十代から三十代の人々の間で、西郷ドンが四十に達してゐたといふことが、人の長として仰がるゝ所以でもあつたが、年ばかりで西郷さんが偉がられたのでは、固よりない。

慶應の初年のことで、土佐の坂本龍馬がまだ勝海舟の門下生で、大阪の海軍所に居つたころのことだ。勝が或る日のこと、

「オイ坂本、お前はまだ西郷サンに逢うたことがあるまいのウ。彼れは海内第一の英傑ぢや修業の爲めに、一度は逢つておかつしやれ」

勝は坂本の人物をよく知つてゐる。磨きをかければ、かけるほど光りが出ると思つたから西郷といふ荒砥石にぶつつからしめたのであらう。

恰度、そのころ西郷は京都に出て居つた。それに勝が添書を持たして紹介してやつた。坂本は海南第一の快男兒だ。年こそ若いが人見しりをするやうな弱虫ではない。

早速出掛けて行つて盛んに議論を吹きかけたが、一向に手ごたへがない。奈良の大佛と問答をしてゐるやうなもので、面白くもなければ、可笑しくもない。

ブラリと歸つて來た坂本が、何にもいはない。逢つたとも逢はぬとも、見たとも見ないとも、トンと挨拶をしない。

そこで勝がシビレを切らして、

「どんな鹽梅ぢやつたかネ坂本」

「……」

「味噌汁の味ぢやない、西郷ドンの腹具合ひのことぢや」

すると、坂本が思ひ出したやうに、口を切つた。

「ハハアン、……あの大男のことですか。アレハとてもいかん。坂本なんどの相手になれる人物ではござらん。先づ西郷は大鐘のやうなもんぢや。大きく叩けば大きく響き、小さく叩けば小さく響く。叩かずにおけば、十年でも百年でも默まつてゐる。聞きしに優る大人物でしたよ。惜しむらくは坂本未だ弱冠、叩く撞木が小さかつたわイ……」と返事をした。

流石に坂本だ。一語にしてよく南洲の全幅をいひ現はしてゐる。あれほどの大豪傑が、自から弱小なるを省みるほどであるからどのくらゐ西郷の腹が大きかつたかゞ、ほゞ想像されよう。

坂本の無二の僚友に中岡愼太郎がある。その中岡は、坂本よりも早く國を出て、長州から太宰府あたりへ、七卿に附隨して勤皇運動に奔走して居つたが、土佐の同僚に與へて、

「お前サン方も、チト眼の玉を大きくせにやいかん。天下は廣し、人材は多し、土佐ばかりで肩つき合はして居つては、井蛙の見たるを免かれぬ」

といつた意味の手紙の中で、かう書いてある。

「天下の勢不レ一、有志の眼を著くべき處は、果して何處に在るべきか。都て相分り兼候へ共、當地邊は、四方の人傑往來仕候こと故、大に時勢に遲れかね申候。當時、洛西の人物を論じ候へば、薩藩には西郷吉之助爲レ人肥大にして、御免の要右(角力取り)にも不レ劣、古の阿部貞任などは、如レ此者かと思ひやられ候。此人學識あり膽略あり、常に寡言にして、思慮雄斷に長じ、偶々一言を出せば、確然人の腸を貫ぬく。且德高くして人を服し、屢々艱難を經て、頗る事に老錬す。其誠實武市に似て、學識を有す。實に知行合一の人物なり。此則當世洛西第一の英雄に御座候」

流石は中岡丈けあつて、動かぬところを叩き出してゐる。

西郷を評した文書はいろ〳〵あるが、この中岡の評ほど金的に當つてゐるものも少ない。

それに、一語をかゆることが出來ない。

「學識があり、膽略があり、平生は默つてゐるが、一たび口を開けば、確然人の腸を貫ぬく」といふのも「幾多の艱難に練り上げられて、頗ぶる物事に老練である」といふのも、右にも左にも、動かし難い言葉である。

殊に「德高くして人を服す」といふのは、西郷の西郷たる眞面目の存するところだ。あれほどの大維新を行つてゐながら、人一人、虫一匹殺して居らぬ西郷の肚を見なければならぬあの大きな胴體が、一皮剝むば、血と涙とで一ぱいになつてゐる。

三　手柄顏をしない

さて、大久保、木戸、岩倉さんを初めとして明治新政府の參議大臣となつて西郷さんが維新の元勳として、一世の敬仰を受けた時、西郷は衆を顧みていつた。

「參議でござるの維新の元勳でござるのと、おいどんが一かどの手柄者か何かのやうに囃やされるのは、何ともお恥かしい次第でごわす。橋本左内先生や、久坂玄瑞先生なんど〵いふ先生方が、生きて居られたら、おいどんはその末席にも出られたものではごわせん。それをあゝいふ先生方が早く亡くなられたればこそ、今ごろおいどんなぞが、チヤホヤされるまでのこと、何とも恐れ入つた次第でごわす」と、

いつも頭を搔いて話されたといふ。筆者は「今西郷」の稱ある頭山立雲翁から、よくこの話を聞いた。

橋本にしても、久坂にしても、西郷サンからいへば、先づ同僚といふところ、今日の紳士ぶつた人間ならば「オイ君」ぐらゐはまだしも、蔭では「彼奴が……」と自分の鼻を高くするところだが、それを西郷サンは、いつも「先生々々」とウラもオモテもなく、尊敬してをつた。

左内にしても、玄瑞にしても、共に一代の英才で、兼ねて學識があり、誠忠無二の勤皇家であつたところから、西郷さんが、特に敬意を拂つたのであらうが、そこに、大西郷の人格

が仄見えもするのだ。

少しばかりの手柄を、なけなしの鼻の先きにブラ下げて、人のしたことまでも自分の手柄にしてしまふ世の中だ、幕末維新第一の大仕事をして、何一つ、手柄顔をしないばかりか、いつも人の影に匿れよう匿れようとしてゐる、あの碧空のやうな大きな心持ちといふものは大根の葉ツパのやうな、一夜漬けの修業で出來るものではない。

功は人に讓り、罪は自分に引き受けるといふほどの、大雅量なくんば、以つて人の長たることは出來申さぬ。

倒幕維新の大業が、抑々何によつて出來たかと云へば、之に答へることは容易ではない。一人や二人、偉い者が出たからとて、固より出來る筈のものでなく、親に別れ、子に離れ、命を玉川の石ころのやうに擲つて、國事に奔走した、幾百千萬人の力が、積もり積もつて山となつたものだが、その力の集積といふものも、目には見えない、國民全體の、開國進取の大氣運に乘じたからに外ならぬのだ。

時勢が太平に倦んで、もうどうにか變らんければならぬといふ潮合が、三百年の德川幕府

更に遡つていへば、頼朝以來、七百年の封建制度を叩き破ぶつてしまつたのだが、それを叩き破ぶる力の中に、西郷南洲といふ一つの力はあまり小さな力ではなかつた。

抑々維新の原動力となつた、薩長連合といふものゝ出來たのも、三條、岩倉を推し出したのも、小御所會議の論判で、王政復古の大幕を切つて落したのも、江戸城明け渡しに、同胞相食むの悲劇を救うたのも、廢藩置縣の難業を成就したのも、西郷一人の力とはいへなくとも、西郷なかりせば隨分危ふい瀬戸際が多かつたのを思へば、偉大なる一人の力といふものが、如何に燦然たる光輝を發してゐるかを知るに足らう。

それほどの西郷が、何一つ手柄顔をしない、御一新が出來上ると、サツサと自分は郷里に歸つて、百姓をしてゐる。犬を曳いては兎を追ひまはして、少しも名譽を欲しない。そんなものは裏の川にサラリと流してしまつてゐる。政權の爭奪に醜い唾み合ひをしてゐる、近ごろの政治屋連とは、まるでお月さまとスツポンほどの相違だ。

聞いても見たまへ、西郷ドンが何といつてゐるかを。

「天下後世まで、信仰悅服せらるゝものは、只是れ一個の眞誠なり」

四　西郷さんの禪味

日露戰爭の時に、日本軍總司令官として、世界に雷名を轟ろかした大山元帥が、まだ一と月に一二度は寢小便を垂れたであらう。そのころの小供のころのことだ。毎朝、夜の白々あけのころに打ちつれて西郷サンの家に勉强に出掛けたものださうである。大山サンの追懷談を聞くと、青年時代の南洲翁の面目が、よく現はれて來る。

これからが大山サンの話だ。

「薩摩ではのウ。先輩や師匠のところへ、本を習ひに行くときには、きつと早朝、夜の引き明けごろに出掛けて行つたものぢやよ。すると大概は先生がまだお寢みになつてゐる。その中に皆んなが、ハタキを打つやら、掃除をするやら、雜巾をかけるやらして、座敷を綺麗に片づける。室内が綺麗に掃除が出來たころになつて先生が初めて起きて來られる。それから机に向つて、本を教へられるのぢや。我々はずつと後輩であつたから、屢々西郷先生のところへ、書物を習ひに行つたものぢやつた。その頃に一つ妙なことがあつた。妙

なことゝいつても、別に一つ目小僧が出るわけではないが、我々は餘程早起きをしてから、まだ薄暗い中に、先生のところへ出掛けて室内の掃除をしたものぢやが、ところで妙なことゝいふのは、こゝのことで、先生は、我々がどんなに早く行つても、寢て居られたといふためしがない。寢て居られないばかりか滅多に家の中に居られない容子であつた。いつも我々の掃除がすむころになつて、何處からか歸つて來られるやうな風であつた。段々聞いて見ると、西郷先生は、我々に書物を教へられる前に、自分は無參禪師のところへ學問に行かれてゐることがわかつた。我々の起きるのが相當に早いのであるから、先生は餘程早起きをして禪師のところに行かれるものと見えるのぢや。ひよつとしたら、前の晩から、夜通し坐禪して居られたのかもしれない。實にそのころの南洲翁の刻苦勉勵といふものは大したもので、たゞ〳〵恐れ入るの外はなかつた」

西郷は馬鹿で、その馬鹿の幅が、どれほどあるかわからぬなぞといはれた西郷サンであるが、その西郷サンのボンヤリしてゐるところばかり見て、人は、西郷サンが小供の時から、ボンヤリして暮らして來たのでもあるかのやうに思うてゐるが、この大山サンの話で、どの

くらゐ西郷サンが勉強してゐられたかゞわからう。

ウドの大木を見て、初めからウドの大木で大きくなつたと思ふものがあつたら、天下の物笑ひとなる。今でこそ亭々として天を摩し根が中空に釣り上つて、中がウツロとなつてゐるが、それとて二葉三葉の育ちもあつたのだ。雨に逢ひ風に逢ひ、霜に逢ひ雪に逢ひ、幾百年の星霜を經たプロセスに、尊い木目が刻まれてゐるのだ。人間だつて同じこと、初めから股倉に毛が生えて生れはせぬ。

無參禪師といふのは、後に明治大帝の侍從となつた吉井友實伯の叔父に當る人で、南昌寺に住して居つた。當時は薩南第一の善知識だとの評判で、學問のあるのは固より勤皇の志の厚い坊サンであつた。「南洲翁が禪學をやつた」と世間でいはれるのは、この無參禪師について學んだことをいふのである。

或る時、無參が西郷サンに向つて、「中庸に喜怒哀樂の未だ發せざる之れを中といひ、既に發して節に當る、之れを和といふとあるが、この「未發の中」といふのはどんなものぢや」

と問はれたことがある。この「未發の中」といふ語は、「中庸」の語ではあるが、禪門公案の一つともなつてゐる。そこで無參が西郷サンに一泡吹つかけたのだ。

すると西郷サンは、流石に勉強家丈けに、いろ〳〵な書物や、例を引いて、この「未發の中」の論理的說明やら、學理的說明やらを加へたものだ。

そこで無參禪師がいはれるには、

「それは口先きでの說明で、何にもならぬ。本物を出して見せろ……」

といはれ、この關門が長く通り拔けられなかつたといふ話がある。

これはずつと後年のことであるが、ある年の正月に、宴會が開かれた。その時西郷サンが上席で、血氣の薩摩隼人連が、左右にズラリと居並んだものだ。

その席に出た藝者の中で、一人男まさりといはれるのがあつた。その藝者を中心にして、若い連中が、大はしやぎにはしやいでゐる。西郷サンは、何を思つたか、ちよいとその藝者を手招きして、自分の膝元によびよせ、

「今日はよく出て來て下さつた。毎々若いモンがお世話になるさうぢやのウ。おいどんから、

厚くお禮を申し入れます。ところで今日はお正月のことでもあるから、何ぞおいどんから御祝儀をあげたいがお受け下さるか」

何はともあれ、西郷サンからの引出物といふので、藝者は大喜び、

「有難うございます」

と貰はぬ先から禮をいふ。

西郷サンはそばの火鉢の中から、眞赤になつた火をはさんで出しながら、

「まことにお粗末でごわすが、ホンのこれはおいどんの志ばかりぢや……」

出された藝者も驚ろいたが、一座の薩摩隼人も驚ろいた。

「西郷先生は途方もないことをする人ぢやなア……」

と顔を見合して、眼ばかりパチクリさしてゐる。

そこは男勝りの藝者丈けあつて、別に驚ろく色も見せず、すぐに晴着の袖を出して受けとつた。

そのまゝ次の室に下つて今度出て來た時には、立派に別の着物に著かへて來てスマシたも

のであつた。それを見て隼人連がやんやと喝采した。

すると今度は、藝者が西郷サンの前に出ていふには、

「先き程は、結構な御祝儀を下されまして、ホンとに有難うございました。ついては私も何か一品御返禮を申し上げたうございますが、先生お受け下さいますれば、これに越したことはございません」

といふ。西郷サンは、ニコ〳〵笑ひながら、

「それは何よりぢや、早速頂戴しませう」

と、何の遲疑するところがない。そこで藝者は、西郷サンと同じ眞似をして、火箸に炭火をはさんで鼻つ先きに突き出した。

「ヤ、これは何より」

といつて、西郷サンは煙管をとつて、その火で一ぷくつけ、

「あゝうまかつた。この味は一生忘れません」

とやつたので、一同やつと胸なで下したといふ。これで西郷サンが「未發の中」の公案を卒

業したといふ話がある。どこまでも英鋒を包むところに、西郷サンの器量が見える。」

五　心の底は一パイの涙

南洲翁の禪學といふのは、活學をやつたので、何も「隻手聲アリ、拍手何ノ聲カアル」なんかと閑日月を弄んで、娯しんだのではない。

「禪をやつたと口先きでいふものは、口の先きに禪がぶら下がつてゐる」

「俺は天下の豪傑ぢや」

といふと、鼻の先きに豪傑がブラ下つてゐる。

或る時、立雲翁を訪ねると、翁はいつになく閑然としてゐた。あの天下に用のない立雲翁のことだ。いつでも閑然……ではないかといふ人もあらうが、翁に接してゐるものは、翁の身邊にいつでも五人十人押しかけてゐることを知つてゐる。だから翁がポツンと居ねむりでもしてゐるところは、ひどく珍らしいのだ。

「また西郷ばなしかネ」

と笑ひながら、

「今日は一つ西郷さんの一生一代の惚ろ氣話をしよう」

と耳寄りな話をされた。その話によると御一新の後の話、明治四五年ごろのことでもあつたらうか、板垣、大久保、木戸なんどの參議連が、京都の何やらで、一パイ飲んだ。

「お互にかうやつて顏を合はせて見ると、天下泰平なものぢやが、あの頃は大へんな騷ぎぢやつたのウ……」

と誰いふとなく、きまつて維新ばなしが出る。

すると板垣サンが、

「お互ひ隨分女の方も追ひまはした方ぢやが、今日は一つ惚け話の持ち寄りをしようではないか」

「ウハハ……成る程それもようがせう……」

すぐに相談が纏つて、堅人の大久保ドンまで、黑い髯の間から、赤い唇を見せて昔話をする。木戸、板垣と、思ひ思ひに話がはずんで來る中に、

「おいも一つ……」
と西郷サンが膝を乘り出した。
それを見た板垣が、大喜び、
「西郷サンの惚け話、それは珍物ぢや」
と油をかける。そんなことには頓著しない西郷の訥々たる口ぶり、
「おいが、どこかで、安女郎を買ひよつたわイ……」
まるで空を摑むやうな話し出しが、先づ一同の頤を解かしめる。
何でも西郷サンの買つた女郎といふのが、飯盛りか何かと見えて、頗ぶる品性が劣等だつたので、いつのまにか、西郷サンの巾着の中から、在り金をつかみ出して、皆んな自分の紙入れの中に仕舞ひ込んだものらしい。さて西郷サンが勘定をしようと思ふと、巾着の中はカラッポでチリンともしない。
そこで西郷サンがいふに、
「何と皆サン、親切なもんぢやごわせんか。たつた一晩のお客、見ず知らずの間柄でごわす

に、おいに一言の挨拶もなしに皆んな使うてしまふた。こんな氣のおけない有難いことはごわせんでした」
といつたので、板垣は、手を拍つて、
「イヤ、これは西郷サンでなければ、出來ない惚けばなしだ」
と大笑ひをしたといふ話。
立雲翁は、この話をしてサテ曰く。
「今ごろの大臣なんといふ手合ひは、大がい腹を立てゝ怒鳴るぐらゐのところぢや。中には繩を打つて警察につき出すものもあらう。金を盗まれて、それを親切と見てゐる西郷サンは何としても天下第一等の人物ぢやよ」
西郷サンの眞價はこゝにあるのだ。天下國家を論じたり、角力をとつたり、沈默を眞似たりするのは、誰れにでも出來るが、金を盗まれて、惚けをいふことは、修養で出來るものでない。
自分はこの話を思ひ出す度毎に、西郷サンの偉大なる人格を思はずにはゐられない。江戸

城で勝サンと向ひ合つて談笑の間に江戸百萬の市民の生命を助けた手際は、やはり、女郎に感心する心の底から湧いて來た、アノ純眞な泉の流れだと思ふのだ。

西郷サンは月給袋を、いつも縁側にホ、リ出して皆んなの持つて行くにまかせたといふ。その中の大半は、弟の從道が藝者買ひにつかつたともいふが、そんなことは西郷サンの知つたことではない。

西郷の奥サンの糸子サンが、ある時西郷に向つて、

「且那様、かう雨で屋根が洩りましては御不自由でござりませうから、もう屋根ぐらゐは、お直ほし遊ばして如何でございませう」

と、あまりむさくるしいので、奥さんが伺はれた。すると西郷サンは大へんな不機嫌で、

「お前サンは何十年と、おいと一緒に暮らしてゐながら、まだおいの心が解からんのか…」

と、眼の玉を丸くして叱られたさうである。

何といつても西郷サンが新築のことを許るされないので、

「兄さんに相談してゐても、ラチはあかぬ、ドシ〳〵造つてしまつて、サアお這入りといつ

たら、まさかお叱りもあるまい」

と從道さんが新築にかゝつたのを聞いて、火の出るやうに叱られたといふ。その西郷サンの心の底に一バイ涙が溜まつてゐるでないか。

六　不平をいはぬ

西郷サンといふと、誰でも先づ拔山蓋世の英雄といふ言葉を思ひ出す。そこで何でも威風堂々、いつでも人を眼下に睨みつけてゐた人のやうに考へるが、それが大間違ひで、西郷サンは一度も威張つたことがない。

十五の時から、村役場の書記のやうなことをさせられ、別に嫌がりもせず、それに一生懸命になつて、二十八歳初めて島津齊彬公の中小姓となるまで、ぢみちにつとめあげてゐる。こゝが並大抵の粗製濫造の豪傑では出來ないところだ。

郡方書記役といへば、見る影もない小天地である。然も西郷吉之助においては、この天地がこの上もない大天地であつたのだ。百姓と一緒に、牛も曳けば、馬も曳いた。道普請の手

つだひもすれば、田の草とりの加勢もした。その時の百姓達から見たら、とても此の男が、後に維新の風雲に乘じ大變革を成就する、絶世の偉人となる人物であらうとは夢にも思はなんだに違ひない。

ところで西郷サンは、そんな事にトントかゝはつてはなゐない。その時その時、自分に與へられたものが、自分の天職だと信じてゐるから、不平のフの字も、口にしたことはなく、固より憤慨もしない。天職を奉じて、一心に働くばかり、彼の天命を信じて又た何をか疑はんといふ境地である。

この一心が、西郷の一生を通じて、玉のやうに輝やいてゐる。小さな自分といふものがないからかゝはるところがない。

引よせて結べば草の庵にて
解くれば元の野原なりけり

である。垣根を結ぶから、庭が狹くなる。何もなければ、一天四空、皆なわが有たらざるはない。ここが西郷の心といふものだ。

七　東湖先生と初對面

二十八のときに、藩主齊彬公に從つて、始めて江戸に出て、西郷の國事運動が始まつた。いはゞこれからが、中原に活動し出したのだ。

時の内閣總理大臣が、福山藩の親方で、阿部正弘といふ若者、二十五で閣老となり、二十六で水野忠邦といふ八ケ間しやの後を享けて宰相となつた男だ。この阿部の後に宰相になつたのが彼の有名な井伊直弼だが、水野よりも、井伊よりも、阿部は若年者ではあつたが、宰相としては器が大きく、雅量があり、大度があり智慧の廻はりもよくて、何處となく長者の風があつた。此の青年宰相と島津齊彬とが取り組んで、日本の立て換へをやらうとした。その時に、西郷ドンが、花のお江戸へ上つて來たのだ。

當時天下に豪傑は多かつた。水戸烈公の輔佐役としてひかへてゐた藤田東湖の盛名は、夙に天下を壓するの概があつた。開國論者としては佐久間象山があり、越前の松平春嶽の懷刀としては年は若いが、切れ者として惧れられた橋本左内があつた。

その間に、名優西郷吉之助ドンが割り込んで來たのだから、舞臺は頗ぶる賑やかとなつて來た。

齊彬の意をうけて、京都の方にも往來をしたが、その頃から、近衛忠熙卿をはじめ、僧月照、春日潛庵、梁川星巖、賴三樹三郎、平野國臣、眞木和泉などの勤皇家とも往復して大いに天下に交游を求めた。

その頃の小石川の水戸藩邸は、後の砲兵工廠のところにあつたが、同郷の士、有村俊齋に伴はれて、西郷は初めて藤田東湖に會つた。當時東湖は、純粹日本神國主義を唱へて、天下勤皇の急先鋒と仰がれて居つた。その論や痛快である。その調や激越である。その色や鮮明である。その聲や壯烈である。幕府に不滿なる志士が、我れも我れもと、東湖の敎へを仰いだのも無理はない。

西郷もまた、その壯快なる音律に恍然として集まつた一人ではあるが、この男、尋常一樣の凡物ではない。初めて東湖に逢つたときに、眼ばかりパチクリさせて、トント頭を下げない。

「今日は……」

との挨拶も仕まつらぬ。伴れていつた有村が困まつてしまつた。仕方がないから、

「此の男が、兼ねて申し上げておきました國のもので、西郷吉之助と申す男で……」

と、西郷のいふことまで、皆んな一人で引き受けてしまはねばならなかつた。

思ふに東湖先生のことだから、大聲叱咤天下の形勢を論じ、宇内の大勢を論じ、さぞかし談論風發したに相違ない。ところが、相棒に罷りつゝ出た西郷がトント物をいはない。感心したのか、しないのか、惚れてゐるのか、ゐないのか、薩張りわからぬ。

「流石は東湖先生ぢや。偉いもんぢやなァ」

と感服してゐるのやら、

「何だか松の木に蟬が鳴いとるわイ」

ぐらゐに思つてゐるのやら、默つてゐるから、腹の中はわからぬ。

「天下の豪傑ぢや。マア〳〵酒でも飲んだ〳〵」

と、東湖が酒をすゝめると、西郷は元來酒の飲めない人だから、少しも飲まぬ。たつてすゝ

められるので、
「さらば一杯」
グッと飲んで、醉つ拂つてしまつた。たうとう東湖先生の前に、ヘドを吐いてしまふとい
ふ騒ぎ、
「西郷は勇者なり」
と、あとで東湖が評したさうだ、小間物屋の開業には、東湖先生も驚ろいたらう。西郷が何
と評すかと思ふと、
「東湖先生は、山賊の親分のやうな人ぢやナ」
といつた。ヘドの豪傑、決して凡でない。

八　橋本景岳へお詫び

東湖が安政の大地震で死してから、二ケ月後のことだ。安政二年の十二月に、原田八兵衛
といふ水戸藩士の邸で、始めて西郷は、橋本景岳と相知つた。この時は唯だ顔を合はせたゞ

けの話で、その後、日ならずして景岳は、品川の薩摩屋敷に、西郷を訪問して來た。時に景
岳は二十二歳、南洲は二十九歳の時のことである。
西郷は恰度その時、同郷の士や、力士などを集めて、庭で角力をとらして、自分は座敷か
ら、それを見物して居つた。
そこへ案内されて來たのが景岳で、眉目清秀、たをやかな婦人にも見まほしき容顔であ
ので、大兵肥滿の西郷ドンは、
『何ぢやこの青二才……』
ぐらゐにでも思つたものか、或ひは、此の男どんな腹工合の男であるが、一寸いたづらをし
て見ようとでも思つたものか、トント相手にならぬ。景岳はと見ると、委細おかまひなしで
威儀を正しく口を切つた。
「拙者主君春嶽公、兼ねてのお仰せに、足下は夙に國事に盡瘁せられ、御修養のほども容易
ならずとのこと、平生敬服をいたして居りました。久しく御芳名は傳へ聞いて居りましたが
未だ親しく謦咳に接するの機會を得なかつたのは、寔に遺憾千萬のことでござつた。今日相

見るを得たのは欣幸に堪えざるところでござる。希くば高教を得て、及ばずながら驥尾に附し、共に國事に力を盡したいものでござる」

と述べ來る。その言葉にも、態度にも、どことなく成人の風があつた。西郷はまるでとり合はぬ氣で手をふつて之れを制し、

「イヤ、これは大間違ひ、おいドンは大馬鹿者、なか〳〵以つて國事につくすなんど、思ひもよらぬことでござる。朝から晩までかうして角力を取つてよろこんでゐる丈けの話、おはんも一つ庭に下りて、角力でもとらつしやれ……」

冷然たる西郷の諷刺には耳をも傾むけず、景岳もさる者、西郷の肚の底を讀んでゐるから道草は食はぬ。進んで天下の大勢を論じ、幕府の事情を說き、更らに之れに對する、自家獨自の經綸をも披瀝した。

ヂッとそのいふところを聞いてゐると、恐ろしくえらいことをいふ。殊に幕府の內狀を說くところなどは、彼れが、藩主松平春嶽公について耳にしてゐる秘中の秘が多かつたので山出しの西郷なんどの、思ひもよらぬところがある。そこで聞いてゐた西郷が、ハッと驚ろ

いた。

「これは容易ならぬ男ぢやわイ……」

心の底でひどく感心した。橋本が歸つて行つたあとで、西郷は一同を顧みて、

「橋本は年は若いが、あれは稀代の英傑ぢや。あまり優しい顏をしとるので、實は少々腹の中で侮どつてをつたが、實に慚愧に堪へん」

といつて、直ぐその翌日、西郷はわざわざ越前邸を訪づれて、前日の失禮を詫びたといふ話である。

西郷が越前邸の玄關に立つて、橋本に案內を乞ふた時に、西郷は式臺の上に兩手をつき、景岳が出て來るまで、頭をあげずに、慇懃にまつてゐたさうである本文の筆者は、この話を越前藩の古老の話として聞いた時に、思はずホロリとして、南洲先生の姿を眼の前に思ひ浮べた。

芝居でもなければ、狂言でもない。眞の底から湧いて出て來る人間の至情が、いつでも西郷を動かしてゐるのだ自分よりは年は若いか、西郷はいつも「橋本先生々々々々」といつて

居つたのは、何といふ心の清さであらう。虚僞と策略とを以つて唯一の政治と心得てゐるものに、この清朗の行ひは出來ない。

九　月明の薩摩潟

井伊大老は、恐ろしく意志の強い政治家だつた。中には、あの男は一片の武人で、政治家ではないと評してゐる者もあるが、今日のヘナチョコ政治家から見れば、どのくらゐ慥かりしてゐたかわからぬ。

井伊が一大彈壓政策を行ふには、實は別に由來するところがあるのだが、そんなことをこでホジくつてゐては、際限がない。兎に角、あの權勢でからに、天下の物議ゝ見向きもせずグヅ〳〵いふ奴は、叩き殺してしまへ、といふ流儀で、ドシ〳〵やつつけたところは、痛快といへば痛快だ。

安政戊午の大暴風に吹きまくられて、やがて西郷の身邊も危ふくなつた。命の親とも頼む齊彬公には死なれ、京都に來ると、近衛忠凞卿から、大したものを預けられてしまつた。

それがアノ僧月照上人だ。月照は、西郷よりは十四も年上で、藏海和尚の後をうけて成就院の住持になつた時には、まだ二十二歳の青年であつた。

近衛卿は、西郷を男と見込んで、月照の一身を托したのだ。さらぬだに涙もろい西郷だ。一先づ奈良に落ちついて見たが、こゝも秋風が身に泌みる。たうとう大阪まで下つて、頃しも九月の二十四日、土佐堀から、一葉の偏舟に托して、九州へと落ちのびた。

どこまで行つても、果てしのない道を、たうとう薩摩まで來てしまつたが、齊彬歿後の鹿兒島は西郷の身をさへ氣遣はれる佐幕風が吹いて居つた。

「月照をどうか日向の方へ送りとゞけて貰ひたい。薩摩では隱し切れぬ」

との依頼を、藩廳から受けたときに、西郷はがつかりして、

「これは駄目ぢや」

と思つた。自分の藩内で隱せないものを他國へやつても隱しおうせるものでない。薩摩では殺したくないから、日向で幕吏に手渡さうとする腹は、固より見え透いてゐる。何にも知らぬ月照を、騙ぶらかす西郷ではない。この藩命をうけたときに、西郷の腹は、大かたきまつ

て居つた。

晩秋初冬の海風は、冷然として人の袂を拂うた。陰暦十一月十五日、冴え切つた明月に乘じた一隻の小舟が、矢よりも早き早潮に送られて、繪のやうな櫻島をはなれてゆく。その舟の中に、月照と西郷と、それから平野國臣と月照の從僕とが乘つてゐるのだ。

海天一塵の浮ぶなく、清淨無垢の大自然の中に、些々たる人間の運命をすてゝ、明月を海波の上に亂して、相抱いて俗塵を謝した西郷と月照と、その心持ちは、詩人でなければ解することの出來ない境地ではないか。

或る人は月照と西郷と、あらかじめ、最初から死ぬる覺悟で舟を出したのだといふてゐるが、それなれば、舟の上で、月照が、

舟人の心盡しの波風の
危ふき中を漕ぎて出でにき

といふ和歌を詠じて、西郷に示さう譯はない。月照が死んだ後で、その懷中から、

曇なき心の月も薩摩潟

沖の波間にやがて入ぬる

といふ辭世の和歌が出て來たのを見ても、先の歌と、後の歌との間に、心のタイムが充分に隔たつてゐる。

西郷ほどの大人物が、何で貧乏僧侶と心中したのか、身を輕んずるにも程があるとの論を爲すものもある。かういふ議論をする人は、心を見ることをしないで、何時でも人の事業の上ばかりで、ソロバンを彈いてゐる人間だ。

西郷は月照と天秤棒で量つてから、これなら損得はないと見て入水したのではない。彼の巨大なる偉人の心は、人間の涙で一バイになつてをつた。

一〇　絶海の孤島で積んだ修養

安政五年の十二月から、文久二年の二月まで、足掛け三年、その次が文久二年の六月から元治元年の二月まで、これまた足掛け三年、前後六年に跨がつて、西郷は絶海の孤島に、島流人の生活を送つた。年齢でいへば、血氣盛りの三十三から三十八まで、棒にふつたといへ

ば、棒にふつたやうなものであつた。

大島といひ、徳の島といひ、沖永良部島といひ、今でこそ沖繩通ひのボッチが、毎日のやうに通うてゐるが、そのころまでは、鳥も通はぬ鬼界ケ島だ。ひとり俊寛僧都ばかりぢやない。大抵の先生が、神經衰弱症にかゝつて、青息吐息となるところだ。

ところが西郷サンは平氣の平左で、こゝでウントコサ、睾丸を練えあげてゐる。人を恨むでなく、世を怨むでなく、ましては藩主を憤るにおいてをやだ。村童を相手にして、寺小屋のお師匠さまみたやうなことをしたのは、まだよい方で、二度目の流謫の時には、純然たる牢中の生活であつた。

牢獄裡の西郷は、濫りには一滴の水を求めず、一椀の湯も乞はず、いつもキチンと正座して、沈思默想に耽けつてゐたさうな。

それで土持政照といふ島司が、氣の毒に思ひ西郷サンに拍子木を贈つて、

「何ぞ御用の節は、どうかこれをお打ち下さい。何でも御不自由のないやうに致させますから……」

といつたが、三年の間、一度も擊拆の聲を聞かなんだといふことだ。

これが近ごろのニセ豪傑だつたら、やれビールだのウキスキーだの、矢鱈に注文するくらゐはまだしも、

「ヤイコラ役人、なぜ早くサンドウキッチを持つて來ないのか、天下の豪傑を知らねェのか」

なんかと、そり身になつてやらかすところだらう。

西郷の心や深し、朝たに夕べに、雨に風に、たゞひたすらに、身を謹慎の底に沈めた。

慈母悲む勿れ身の厄に罹るを
古來斯くの如き幾忠臣
死に臨んで自若たる平日の如し
天を怨まず人を咎めず

この詩は、獄中にある西郷が、森山三十の切腹を詠じたものだが、詩中の心が、そのまゝ西郷サンの心でもあつたのだ。

元治元年の二月、春まだ寒き如月二十二日、鹿兒島から、遙かに波路を越えて、西郷赦免

の汽船が島についた。役人が西郷サンをつれて海岸にゆくと、檣頭高く、丸に十字の藩旗を飜へした藩船が投錨した。それを見た西郷の眼からは、思はず涙が湧き出でた。嬉しさが込みあげたのでもあらうが、久し振りで懐かしい藩船の威風を見た刹那の感情が思ひやられる。

やがて召還の使者が上陸して來た。その中には舊友吉井友實の姿も見える。彼れもあり、誰れもある中に、流石は血を分けた弟慎吾、海角に、色褪せて立つてゐる兄南洲を目ざとくも見出して、思はず驅け寄つて、その手をしつかと握り、

「兄サン……」

と叫んだきり、萬感一時に胸に逼まつて言葉が出ず、嗚咽の聲音のみ、松ふく風に和した。

此の一瞬、流石に猛き南洲も、思はず固く弟の手を握りしめ、

「オ、、慎ドン、マメでごわしたか」

一語の後は、泫然たる涙の雨となり、天地も爲めに暗らきの感があつた。あゝ誰れか、此の一場の光景を追想して、涙なきを得るものぞ。西郷サンだからいふのぢやない。鳥は木に

棲み、魚は水に棲み、人は情けの下にすむといふではないか。人間涙あつて、初めて萬物の靈長だ。

一一　相手の心になつて

薩長聯合が出來たのは、慶應二年の正月のことであつた。

それまでの薩長といふものは犬と猿とのやうなものであつた。プロセスをいへば古くなるが、長州では「薩賊會奸」といつたり、馬關海峽は「三途の川」ぞといきり立つて居つたものだ。

薩州側では、長州は天朝の賊、痩浪人に何が出來るかと睨みつけてゐる。その薩長が手を握るのだから、元より尋常一樣の筋道では出來る筈がない。

流石に坂本龍馬は、天下の快男兒だ。一青年の力、よく兩藩を合して一にした。が、左樣に、口でいふほど、お茶の子サイ〳〵、輕くはまゐらぬ。そこにはいろんな人傑の力も要る譯で、殊には何としても、大西郷の力といふものが、ドシンと据わつてゐる譯だ。

西郷がいつやら長州を通つた時に、坂本の斡旋で、長州の豪傑連と、膝をつき合はして談合したことがある。その時に長州人は、英氣颯爽、

「薩長聯合も結構でござるが、こつちから頭を下げて降參は仕らぬ。ドダイ薩摩のやり口が氣に喰はぬわイ。首鼠兩端を持してからに、會津なんかと手を握り、弱いもの窘めをするのは怪しからんぬことぢやよ。先づ薩州から降參して來い。降參しろ、ヤイ薩摩ッぽう」

意氣軒昂、當るべからざるものがあつた。西郷は例によつて、默然として傾聽して居る。長州豪傑も、あまり手答へがないので、拍子抜けがしてゐると西郷は何と思つたか、やをら疊の上に兩手をつかえて、徐むろにいつた。

「御尤もでごわす。降參でごわすか、ようごわす、この通り……」

といつて、頭を下げて、低頭平身した。アノ西郷が無言にして平伏した。その赤誠と大度量とに、流石の長州人が感動させられた。

京都でいよ〳〵木戸、西郷が會見した時に、木戸は西郷を前にして、恨らみつらみの、百萬遍を述べつらねたさうな。

その時にも西郷サンは、一言もいはず、默つて木戸の怨言を聞いて居つた。聞き終つた西郷は、松菊の面を見もやらず、

「お察し申します」

といつたきり、うつむいてしまつたさうだ。

かうなると流石の木戸も面喰らはざるを得ない。相手が食つてかゝれば、景氣づいて來るが、西郷のやうに、頭を下げてしまつては、喧嘩にならない。

その時、席上に連なつてゐた品川彌二郎サンの話に、

「あの時に、木戸のいふところは、我々長州人でさへ、傍らで聞いてゐて、隨分缺點があり非の打ちどころがあつた。薩州人が聞いたら、嘸かし反駁のしようが、いくらもあつたらうと思ふたのに、西郷サンは「御尤もの仰せ、お察ししします」といはれたきりで、何にもいはなかつた。我輩はあの時始めて、西郷サンの大海のやうな腹に心から感じ入つたよ」

といふ話であつたが、西郷は度量が大きいといふよりも、あの時は木戸の心持ちになつて、木戸の胸の中に同情する心が一ぱいになつてゐたであらう。

孤城落日の長州を盛り返へすべく、罪なくして勅譴を受くるの身となつた藩主の寃罪を雪ぐべく孤身深く京都に乗り込んで來てゐる木戸松菊だ。

その面を見れば、心配が先きに立つてか、いたくも打ちやつれてゐる。その姿を見れば年久しき雨風に吹きさらされて、打ちほふけてゐる、木戸のいふところに、無理があるにしても、非理があるにしても、長州の身になつて見れば、まだ〳〵あれくらゐでは、言ひ足らぬくらゐだらう。東西に奔馳し、南北に來往し、今は憔悴し果てたる桂小五郎に對して、猶ほその背に鞭うつの蠻勇を、西郷は持ち合はさない。

「鳥は鳴けども涙おちず、日蓮は泣かねども涙ひまなし」

とは、豪僧日蓮の言葉だが、この心が當年の西郷の胸の中だ。

一二　懷劍は切れますか

打つて一丸となつた薩長の精兵は、ドシ〳〵京都に乗り込んで來た。之れに對して幕府方でも會津、桑名の兵を中心にして、要心堅固に備へを立てゝゐる。イザといへば、共に砲火

の間に相見え、男らしく一戰するの覺悟だ。

慶應三年の十二月八日から、宮中、小御所において一大會議が開かれて、九日まで引き續いた。いふまでもなく、王政復古の大號令を、出すか出さぬかの、一大事を決するの會議だ。

公家方を初めとして、列藩主及びその陪臣に至るまで、いかめしく會議に參列してゐる。尤も陪臣は席上には出ないが、別室においてその成行きを監視してゐる。

この席上で、最も勇敢に論戰したのが、土佐藩主の山内容堂と、岩倉友山とであつた。山内は公武合體論、岩倉は王政復古論で、潔よく渡り合つた。

流石は山内容堂で遠州掛川の五萬石から、土佐二十四萬石の大々名になつた山内一豐の衣鉢をつぐ丈けに、德川に恩はあつても怨みはない。その上に手放しで議論の出來る雄物であるから物凄い。

「凡そ皇政の大本よりすれば、一視同仁、幕府を視るも、諸藩を見るも、固より同一でなければならぬ。宜しく慶喜をして大政に參與せしめ、諸藩之れを助くるの、穩當なる御處置あつてこそ、初めて眞の皇政といふべきだ。然るに德川氏を度外視して、二三の雄藩を以つて

皇政の維新を計らうとするのは、畏れ多くも、幼冲の天子を[illegible]して、權柄を奪はんとするの嫌ひがありませうぞ。是れ實に由々しき天下の亂階ぢや」

と、頗ぶる猛烈に肉薄した。ところが岩倉もさる者、このくらゐで決して窮しはせぬ。

「容堂どの、御議論はともかく、幼冲云々の語は不敬でござらうぞ。天子は幼年に在しますと雖も夙に叡明にましまし、現に今日は出御ましまし。聽聞あらせられんとしてゐる、宜しく失言をお取り消し召され。慶喜にして眞に悔いる心があるならば、何故に官位を去り、封土を返上しないのでござるか、君に忠なるの心あらば、又た眞に皇政を欲するならば、先づその身を謹慎するが當然ではござらぬか」

將さに蒼龍は雲を呼び、猛虎は嵎を負うて風を起すの形があつた。が容堂の論鋒は頗ぶる鋭く、殊には越前侯松平春嶽の贊成を得たので、岩倉も流石に、次第に受太刀となつて來た。

こゝは國家の重大事であるから、双方とも激してはならぬといふところから、一先づ休息して、更らに再開といふことになつたので、一同席を退ぞいたが、岩倉の顏色は青ザメてし

まつてゐた。

陪席の薩藩士、大久保利通、岩下方平なんぞその面々は、頗ぶる心配した。この大事の場合において若し、萬一議論に敗ぶるゝにおいては、これまでの運動も水泡に歸するといふので非常な心配だ。

岩下は、何はともあれ西鄕の意見を聞かねばなるまいと、人を急派して西鄕を迎へにやつた。會議のやうすを手短かに話して、扨、

「如何いたしたものでごわせうか……」

と西鄕の決意を糺すのであつた。

すると西鄕サンは平氣なもので、

「何も議論はごわせん。岩倉サンに、おはんの懷劍は切れますかと聞いて下され」

といつたまゝサツサト出て行つてしまつた。

此の西鄕の一語を、岩下から聞いて、岩倉の面色がサツと變つた。

「容赦はいらぬ。殿中において、容堂と刺し違へよ」